シネマ気球
第40号 200円

シネマ気球©
編集兼発行人　関田孝正
〒270－0107
千葉県流山市西深井339－2
TEL 04（7153）1533
FAX 04（7156）7122

「コリーニ事件」

映画館で観る映画は、やっぱり最高

新型コロナウイルスのせいで、劇場での映画鑑賞が自粛させられ、数か月振りに映画館で見たのが本作品。館内は感染防止のため、客席は前後左右空席。この作品を観ようと思った理由は、昔観たマカロニ・ウエスタンの傑作「続 荒野の用心棒」で主演したフランコ・ネロの現在の姿をスクリーンで見たかったからだ。さすらいのガンマンが棺桶から回転式マシンガンを出し、敵をせん滅する荒唐無稽のシーンが記憶に残っている。

ドイツ映画「コリーニ事件」は、高級ホテルの廊下を歩く初老のコリーニ（フランコ・ネロ）が、部屋を訪問するところから始まる。

高層階の室内で二人の男は無言で対峙。

訪問者の手にはドイツ軍用銃ワルサーP38。部屋を出たコリーニの足跡には血のりが。

男は逮捕されるが、一切黙秘。

新米弁護士カスパーが、国選弁護人に任命され、引き受けた。弁護人が犯人と接見しても、頑なに黙秘。明確な殺人事件に対し動機不明のまま弁護することになるカスパーだが、被害者が彼の恩人でもあったことを知る。

しかもカスパーは、小さい時から被害者家族と親しく、被害者の孫の女性、彼女はカスパーの友人の姉、に恋愛感情すら感じていた。私情を挟まず無言の被告人を弁護できるのか。

映画とはいえこの人間関係は法的に許されるのかと思いながら見入ってしまった。

被害者は大手企業オーナーで金持ち。

事件は、世間の注目を集め、裁判が始まった。検事にはカスパーが学生時代に法律の講義を受けた老獪な検事。その横には、恋心を抱いたことのある遺族女性。

裁判の進行とともに、少年だったコリーニの故郷イタリアの田舎町での、ドイツ軍将校が関係する住民虐殺事件につながっていく。

見応えある映画だった。

映画館で観る映画は、やっぱり最高。

（絵と文・山下雄平）

『ジョーカー』のラストシーンは、謎に包まれている。……この世はすべてジョークなのか！

門馬徳行

『ジョーカー』(2019年公開)の舞台は架空の都市、ゴッサム・シティだが、1981年ごろのニューヨークをベースにしているらしい。つまり、治安の悪化と腐敗がはびこっていて貧困と差別、勝ち組と負け組に分断された末期的都市が物語の背景になっている。この作品は、そんな状況から生まれた貧しい道化師の恐ろしくも悲しい報復のドラマだ。開巻まもなく、アーサー（ホアキン・フェニックス）が街の若ものたちに看板をぬすまれ袋叩きにされるシーン、簡単に解雇されるシーン、市の政策でカウンセラーの施設も閉鎖、クスリももらえなくなるシーンなど、アーサーにとってやり切れない、辛い出来事が続き、しだいに社会から疎外されていく。また、後半、自分は孤児？とわかり母親ペニー（フランセス・コンロイ）への憎悪、父親とおぼしきトーマス（ブレッド・カレン）への確執なども語られる。さらに、心を許せる友人と思っていたソフィ（ザジー・ビーツ）の存在も彼の妄想とわかる。アーサーは、ぐいぐい追い詰められていく……。

○

まったく暗い絶望的なこの物語は、見る者を深く失望のどん底に連れて行ってしまう。あまりにも救いがない。本来、映画とは、〈絶望〉と無縁の産物だろう。どんなに希望がなく閉ざされた世界であっても、かならずそこには一つの光明があるものだ。同じ年に公開された超リアリスト、ケン・ローチの新作『家族を想うとき』でさえ、ラスト、まさに八方ふさがりの境地に追い込まれた主人公に対し、ローチは決して絶望の札は切ってない。作者としてかすかな温かい眼差しを残している。状況は厳しいが望みはすてるな、お前は何も悪くない、とでも言おうか。そんな作者のつぶやきが感じられる。それに比べ、『ジョーカー』は心底、ゾッとする雰囲気が全編にあふれている。トッド・フィリップス監督は、救いの作業をいとも簡単に放棄し負け犬であるアーサーを、無情にもどんどん追い込んでいく。社会から弾き飛ばされ、自らのアイデンティさえも崩壊していく男を、冷酷に突き放していく。彼にやさしい視線を向けたのは同僚のゲイリー(リー・ギル)だけだ。

「おまえだけだ。やさしかったのは。」

○

ふとしたことで、彼が拳銃を手に入れるくだりが映画的にわざとらしい、露骨な作為演出だとの指摘があった。たしかに、ここで拳銃を手に入れなければ、その後の急展開はありえない。が、もともと映画とは、意識的かつ作為的な世界だ。その仕掛けの中でどんな物語を構築していくか、何を描いていくかが大切なのではないだろうか。銃を入手した瞬間、彼はおもわず、暴力という報復手段を得てしまったに違いない。見落としてならないのは、深手を負っていたアーサーに救いの手を差し伸べる者はいなかった。と、いうことだ。

「僕が求めていたのは優しい言葉とハグだ。」

この格差社会は、弱者を切り捨てることによって成り立つ傲慢な世界に、なっている。

○

最初、この作品はDCの人気キャラ〈ジョーカー〉誕生の前日譚だろう、その後、宿敵〈バットマン〉との対決が待つ『ダークナイト』シリーズへ繋がっていく流れかと思っていた。というのも、ヒース・レジャーが演じたジョーカー像のあまりにも鮮烈な衝撃が残っていたからだと思う。バットマンを押しのけたジョーカー誕生のいきさつが、どう明らかにされるのか、観客はそう期待したに違いない。だが、監督は、それらと一線を引く作品に、別物のつもりで撮った、と語っている。とすれば、本作はDC路線から完全に独立した作品として観なければならない。一人のピエロの物語として観なければならない。そのあたりが、謎のラストシーンへの伏線になったのではないか、と思われる。

○

……幻想と現実が混沌し、限りなく絶望したアーサーは、暴力に覚醒、富裕層の証券マンを撃ち、人気のTV司会者（ロバート・デ・ニーロ）を射殺し、世の中の不平、不満を誇大化させた群衆の中

で、悪のカリスマになっていく。そのドラスティックな行動に共感、共有できるかが、作品の肝だ。ここが評価のわかれるところであり、やや性急な問題提起、メッセージ性に突っ走った感が残されている。そして、暴徒の歓声の中、やおらボンネット上でダンスを始めるジョーカー。このジョーカー誕生のクライマックス・シーンで映画は終るべきだった。終わって欲しかった。が、なぜか映像は続き、ジョーカーが血の足跡を残しながら病院を歩き、踊る、逃げ回るラストシーンが待っていた。

○

『ジョーカー』は、もろ手を挙げて勧めたくなる作品ではない。閉塞感に満ちたおぞましい作品だからだ。だが、完全に無視し否定すべき作品とも思わない。体の芯のどこかで妙にひっかかるものがある。彼が、街の階段で踊るシーン、バスの窓から絶望的な眼差しを向けるシーン、ラスト近く、自分の血を唇に擦り付ける戦慄的なシーン。そんなジョーカーを、否定できない何かが、頭の中でアメーバーのように増殖していく。それはたぶん、現実世界はすでに、ここで描かれた以上の格差社会になりはてているからだろう。富を有する者はいい、が無き者はどうなるのか。

○

なんとも不可解なラストシーンは、こうだ。

病院の一室が映り、アーサーらしき人物がカウンセリングを受けている。彼は、笑い、「面白いジョークが浮かんだ。理解できないだろうけど。」と呟く。なんだろう、この台詞の意味するところは？この後、トーマス夫妻が暴漢に襲われ、幼きバットマンが立ち尽くすシーンが入る。更に、血の足跡を残しながら病室を出て行く……。果たして、「面白いジョーク」とは？　なぜ、トーマス夫婦殺害のシーンが唐突にインサートされたのか？　あれが、ジョークなのか？間接的であるにしろ、自分がライバルのバットマンを誕生させてしまったということなのか。

○

まるで、取ってつけたような謎のラストシーンについて、さまざまな解釈がなされている。まず、素直に①時系列説。暴動の後、彼は警察に捕まって病院に入れられている。それでカウンセラーを殺害し脱出を図り、その後ジョーカーになる。が、夫婦殺害シーンの意味が不明。②未来説。いや、あのシーンは事件後から相当時間が立っている〈現代との視点も〉のではないか、という捉え方。だから、病室の人物は、アーサーではない。つまり、この後、彼の影響を受けてジョーカーになりうる人物ではないか、という見方。③過去説。このラストシーンは、本編が始まる前の映像だという見方。最初の方で彼が以前入院していてドアに頭をぶつけるワンシーンがある。つまり、あの後、彼は必然的にジョーカーになったのではないかと。もともと彼はやばい奴だったのだ。④妄想説。この話は全てアーサーの妄想だった、というオチ。即ち、最後の病室のシーンだけが現実だ、という考察。でも、これだと、彼は妄想癖があるので、作品自体が妄想の妄想という二重構成になってしまう。それに、全てを妄想とするのならあまりにも短絡。この作品が含む毒が、あっというまに拡散してしまうような危険性がある。仮に、あのバットマンも妄想だとしたら、この世にヒーローは存在しなくなる。〈ヒーロー否定説〉。それは大人やこどもたちの夢を破る危険な〈ジョーク〉だ。が、ある意味、それは今日の現実社会を反映させているかもしれない。実際、〈善を助け悪を挫くヒーロー〉なんて、この世に存在しないのだから。

○

どれが〈正解〉なのか、まったくつかめない。監督は、観客を惑わせるような結末にしている。われわれを挑発しているようだ。だから、〈答え〉はないのかもしれない。全編にわたって、どこまでが現実で、どこまでが妄想なのか。勝手に判断してくれと、いうことなのだろう。いずれにしろ、監督はすべてを明らかにすると語っているので、今は、それをただ待つしかない。悔しいが、われわれは、彼が意図した〈罠〉にまんまと嵌ったままなのだ。当初、この作品は、マーティン・スコセッシ監督でレオナルド・ディカプリオ主演の予定だったらしい。仮に、そのまま制作されていたら、どんなラストシーンになったのか？

○

こんなひどい世の中では、もう笑うしかない。この世の出来事は、すべてジョーク！と、ジョーカーは叫んでいるのだろうか。

私のお気に入り　5

押切令子

高校生の頃に観た、うろ覚えの名作

宇井　相

通っていた県立高校は、生徒の自主性だけでなく、教員の自主性も重んじられる自由な校風でした。

例えば世界史の先生は、ただ教科書を丸暗記させるような授業をしません。土曜日の放課後に暇そうな生徒を集めて、学習の役に立ちそうな映画の鑑賞会を開くのです。

場所は、音楽教室。再生装置は、当時珍しかったレーザーディスク。映像の大型ブラウン管は、60インチだったか80インチだったか。音響は、4chサラウンド。

現代の家庭用シアタ装置と比べれば、映像も音響も見劣りするものでしょうが当時の高校生には、贅沢でたまらぬものでした。

その鑑賞会で観たのが、「ベン・ハー」。上映後、一緒に観たクラスメイトが興奮していたので多分、素晴らしい内容だったのでしょう。たしかに有名な馬車レースのシーンは、うっすら覚えています。でも筋書きは、半分寝ていたのか、まるで覚えていません。

別の日の鑑賞会で「スパルタカス」を観たのも良くなかった。同じローマ時代の話なので、記憶が混線してごちゃごちゃです。奴隷の剣闘士が車輪にナイフがついている馬車に乗って反乱を起こして仇を討つ、そんな話だったっけ？

先生ごめんなさい。映画観賞会は、とても良い思い出です。でも肝心の学習効果は、なかったようです。

2、**「戦艦ポチョムキン」**

これも高校の鑑賞会で観ました。ソ連の白黒無声映画。ポスターのイラストと乳母車が階段をガタガタ落ちるシーンは、覚えていますが…。なにせ半分寝ていたものですから。

3、**「プラトーン」「地獄の黙示録」「フルメタル・ジャケット」**

映画好きの友人の家にお邪魔して、レンタルVHSで観た三本。いずれもベトナム戦争を米国側の視点で描いた作品。友人曰く、これを観ぬことには戦争映画を語れないとか…。

でもねぇ、どれも似たり寄ったりの内容で例によって記憶が混線です。霧に煙る密林をヘリコプタが編隊飛行し、わめき散らす鬼軍曹に鍛えられ、爆弾と地雷が炸裂すると云う、そんな話だったっけ？

なお自分の名誉のために申しますが第二次世界大戦、とりわけ欧州戦線を描く映画は、何を観てもたいてい良く覚えています。登場する航空機や戦車を追うのが忙しく、途中で寝ることもございません。

4、**「時計じかけのオレンジ」**

同じく映画好き友人の家で観たはず。観たことは、覚えていますが内容は、超難解でうろ覚え。いや、それどころかさっぱり覚えていません。

5、**「タッカー」**

深夜のテレビで放映されたものを観て、とても感銘を受けた米国映画。才能に長けたエンジニアが自動車会社を起業して、斬新な発想で設計された三つ目の乗用車を世に問う。しかしその先進性ゆえに大企業の反感を買い、裁判にかけられ、挫折してしまう。

内容は、良く覚えている積もりですが、何十年も前にたった一度だけ観たきり。だいぶあやしいです。

『切腹』『男はつらいよ』製作の熱血漢が生み出した、歴史に埋もれた大衆娯楽映画の数々——。現場に飛び散る汗、涙！　1960年代の映画屋たちの熱気が甦る。映画評論家、書評等絶賛！

昭和映画屋渡世

坊っちゃんプロデューサー奮闘記

斎藤次男・著
四六判並製 256頁／2200円＋税

ごまめ書房
〒270-0107
千葉県流山市西深井339-2
TEL 04-7156-7122
FAX 04-7156-7122

友人が70歳になって俳句を始めました。毎朝食事前に散歩しながら俳句の題材を探すのだとか。→こういうのを「ハイカイ老人」というのですね。（本書より）これまで書き溜め、人様の前で発表したダジャレ160篇を一挙公開！

ダジャレ工房

山田　徹・著
新書判 200頁／1000円＋税

田舎の映画生活3

―映画館がやってない日がくるなんて―

岩舘範子

『ジョーカー』（２０１９）
監督＝トッド・フィリップス
ストーリー＝ゴッサム・シティは腐臭を放っていた。街角にはゴミが山積している。貧富の差は拡大し、困窮者は軽々しく暴力に手を染めた。

貧しい道化師アーサー・フレック（ホアキン・フェニックス）の身近にも不幸がまとわりついていた。脳の損傷から、緊張すると笑いの発作に襲われる。同居の母は心臓と精神を病んでいる。福祉予算が削減されて、ソーシャルワーカーのカウンセリングと向精神薬の処方が終わりだと告げられる。

ピエロ派遣プロダクションに所属し、商店の店じまいセールを宣伝していたアーサーの掲げる看板をストリートギャングの若者が奪ってこわし、彼を袋叩きにした。

契約不履行と責められて落ち込む彼に、同僚のランドルが拳銃を差し出した。これで身を守れと。しかしこれは裏目に出る。小児病棟での仕事の最中、拳銃を落とした彼は解雇される。

そして道化師の扮装のまま地下鉄に乗った彼は女性をからかう3人のビジネスマンを注意するが返り討ちにあい、発作的に彼らを射殺した。

意外な高揚感に包まれたアーサーは隣人のシングルマザーのソフィーを強引に口説いて恋人関係になる。スタンダップコメディアンを目指す彼はナイトクラブに出演するが、客は無反応だった。だがこのすべりっぷりが、人気バラエティ番組の司会者マレー・フランクリン（ロバート・デ・ニーロ）に取り上げられ予想外の反響を呼びアーサーは出演依頼を受ける。

アーサーの母は30年前、トーマス・ウェインの使用人として働いていた経歴があり、密かに恋に落ちてアーサーはウェインの息子だと主張していた。それが、母と血縁すらなく愛も絆も幻想だと気づいた彼は母を窒息死させる。恋人ソフィーに助けを求めるが、アーサーを知らなかった。彼女とのことは妄想だったのだ。彼に守るべきものは残っていなかった。

アーサーはメイクと衣装に身を固めて、マレー・フランクリン・ショーの楽屋に入る。ホストのマレーに、「僕の事は本名でなく、ジョーカーと紹介してくれ」と注文する。

ここからジョーカーとして生まれ変わった大舞台が始まる―。

今まで『バットマン』は何本もあった。バットマンもジョーカーも何人もの俳優が演じてきた。

『ダークナイト』（２００８）のヒース・レジャーのジョーカーにはやられた。ユーモアはなく、ビジュアルも不気味で狂気を感じさせた。そのジョーカーが誕生する話であると思えた。

最初ホアキンがかなり体重を落としたってわかる。道化師の衣装に着がえる時の背中を見てこわくなるくらいだった。相変わらず演技は大まじめ。笑いたくないのに、脳に損傷があり、緊張すると笑ってしまうのが、彼の人生を表しているようである。

一番好きなのは、ジョーカーが、（最初はアーサーのままだったか）とある場所でダンスをするシーンだ。2度目はなぜか泣ける。楽しそうではあるが哀しさが伝わってくる。

これはホアキンのための役と誰もが思うはず。共同脚本の監督によると、ホアキンのために書いた役だって。「ホアキンが演じてくれるとしたら」と想像して書いたところもあるとか。この役柄に、肉体と魂を捧げられる俳優が必要だったけど、彼は全力を尽くしてくれたと言っている。そんな感じが伝わるジョーカーだった。

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（２０１９）
監督＝クエンティン・タランティーノ
ストーリー＝１９６９年2月、ハリウッド。中堅俳優リック・ダルトン（レオナルド・ディカプリオ）は、いまではドラマの悪役やゲスト出演という単発の仕事で食いつないでいた。相棒のクリフ・ブース（ブラッド・ピット）は長年リ

ックのスタントマンを務めてきた親友だ。映画プロデューサーのシュワーズ（アル・パチーノ）からはイタリアの西部劇への出演の依頼を受けるが、都落ちのような仕事はしたくないと断る。クリフもまたTVの撮影現場で揉めごとを起こし、仕事を干されぎみだった。

シエロ・ドライヴにあるリックの自宅の隣には、監督ロマン・ポランスキーと、その妻であるシャロン・テイト（マーゴット・ロビー）が住んでいる。

ある日リックはクリフの運転で撮影所に向かう。TV西部劇の悪役に起用された。準備万端のはずなのに、前夜に酒を飲みすぎてコンディションは最悪。もう後がなかった。

そのころ、暇をもてあましてドライヴしていたクリフは以前見かけたヒッピーの少女と再会。彼女が仲間と暮らしているというスパーン映画牧場まで送り届けることに。クリフにとっても馴染み深い撮影地のひとつだった。怪しい予感を覚えながら牧場に辿り着くと、そこにはチャーリーという男を信奉するヒッピーの集団がいた…。

一方、シャロンは気ままに休日を過していた。シエロ・ドライヴに運命の夜が訪れるまで、あと6ヶ月―。

タランティーノ作品の9本目。面白いのか？　面白いという言葉も難しいけど、この作品は難しい。でもレオとブラピの初共演。一緒なのを観られて嬉しい。その2人のこの時代のコスプレだけでも楽しかった。その上ネタバレだけど、ブラピは超強い、そして腹筋も◎。

パチーノ、カート・ラッセル、ダコタ・ファニングなどを観られてよかった。西部劇でリックと共演したウェイン・モウンダー役のルーク・ペリー（TVシリーズ「ビバリー・ヒルズ高校白書」）がなつかしかった。残念ながら19年2月27日に他界している。

売れる前のブルース・リーがリックとからむんだけど、口が達者でいけ好かないキャラで好きになれず観てて楽しくなかった。マックイーンはちょっと似ていてドキドキした。本人ほど存在感はなかったな。リックが『大脱走』に出ていたら…でマックイーンのヒルツを演じているのが笑えた。もっと楽しい作品かと思ったけど、チャールズ・マンソンとファミリー、シャロン・テート殺人事件を題材にしてるから無理か。

『1917　命をかけた伝令』（2019）

監督＝サム・メンデス

ストーリー＝1917年。第一次大戦がはじまって3年。西部戦線では、塹壕線を挟んでドイツ軍とイギリス・フランスからなる連合国軍がにらみ合っていて、多大な犠牲をともなう悲惨な消耗戦をくり返していた。4月6日金曜日。第8連隊に所属するウイリアム・スコフィールド（ジョージ・マッケイ）とトム・ブレイク（ディーン＝チャールズ・チャップマン）は、ある重要なメッセージを届ける任務をエリンモア将軍（コリン・ファース）から与えられる。マッケンジー大佐（ベネディクト・カンバーバッチ）率いるデヴォンジャー連帯第2大隊が退却したドイツ軍を追っていたが、航空写真によって、ドイツ軍の罠だったことが判明。なんとしてもこの事実をマッケンジー大佐に伝えなければならない。通信手段はドイツ軍によって遮断され、スコフィールドとブレイクが最後の頼みの綱だという。前進する第2大隊に追いつくにはドイツ軍が築いたトラップだらけの塹壕や、ドイツ占領下の町を越えていかなくてはならない。経験豊富なスコフィールドは慎重を期そうとするが、目指す部隊に実の兄が所属するブレイクにとっては一刻の猶予も許されない。2人は泥にまみれた塹壕を這い出て、張りめぐらされた鉄条網をかいくぐり、「ノーマンズランド」と呼ばれる無人地帯を通り抜け、危険なドイツ軍の占領地へと分け入っていく―。

「驚愕の全編ワンカット映像」ってどんなのか期待した。観たら納得!?（全編を通してワンカットにみえる映像）だったけど、確かに初体験だった。

伝令の2人を追ってストーリーが進んでいくから、カメラは2人から離れない。緊張感や臨場感は確かにある。

アンドリュー・スコット、マーク・ストロング、カンバーバッチ、ファースが出演しているが、時間が短いのでちょっとさびしい。

この作品は演劇のようだと言われればそうかもしれない。監督のメンデスは舞台演出家だった。スティーヴン・スピルバーグが彼の舞台を観て、映画監督の道へ誘っ

【筆者の近況等】岩舘範子＝会社でイベントの為、早出の日が多く、当日は朝5時半に家を出る。体力検査の日は朝6時から走る。4月から6月はそんな感じ。やっとゆっくりできる。

たのは有名な話―らしい。スクリーンの俳優たちの「時間」を観客にも共有させる。リハーサルを積み重ねて、順撮りして作品を仕上げていくというやり方は徹底して芝居の流れを大切にしている。通常の映画の50倍のリハーサルをしたとか。舞台演出家だから可能だったのかもしれない。ホッとするシーンやきれいな花のシーンは心にのこる。

コロナの影響はいろんな所にでているが、映画館がやってない日がくるなんて想像すらしなかった。やってないんだから、公開される作品も遅れに遅れている。今は再開されたけど、行くまでのバスが1時間密室になるので、コワくてまだ行けてない。チェックしたら「アイアンマン3」、「ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー」をやってる。それでもいいから観たい。あたしの行くフォーラム八戸は、田舎だし、シネコンだから、チケット売場に多少人が並んでいても映画を観るのに〝密〟にはならない。なったことがない。東京で、隣の席に人がいないというのを経験したかったなあ。

コロナが教えてくれた「真実」の自分

堀江広子

パソコンに向かって映画評を打っている六月上旬、日本列島は新型コロナウイルス感染急増による緊急事態宣言して、後に徐々に一部解除、経済活動は少しずつ動きだし、医療崩壊寸前でとどまり、なおも世の人々の不安感は拭えぬままの日常。ウィズ・コロナで生きていくしかない様相である。

そろそろ第二波がやって来そうな気配だが、ＰＣＲ検査が遅々として進まないのは、国の各省庁の縦割り行政が影響しているように見える。シネマ気球第40号が手元に届く夏は、どのような風景になっているのだろう。

暑い夏にマスクを着け続け、感染に怯える日々なのか、コロナ禍が沈静化し落ち着いた夏を迎えているのか。

6月7月のゲリラ豪雨や台風被害が追い打ちかけて日本はボロボロになっているのではないかなどと、柄にも無く日本の事をこれほど憂うのは初めてである。何せこれまでは、自身の身に絶望的な出来事が起きようとも世は淡々と栄え、先進国日本は意気揚々とその繁栄をむさぼり、富者は益々豊かに、貧者はよろよろ生ける屍のようになっていたから。

今はどうだ。経済活動がそろそろ動き始めたとはいえ、食文化、観光、芸術、などが急速に力を失い存続が危ぶまれている。なのに救済の手は届かない。家族間のラインで安倍首相のマスク姿を茶化したら、娘と息子に週刊誌的な視点で物事を捉えるな、建設的な事を言ってくれと、えらくたしなめられる始末。建設的な事を言ってみたところで誰かに茶化されるだけだろうと思ったが。

そんな頃、一つの興味深い分析に出会った。いわゆるファシズムが生まれる環境というのが、権力側の抑圧のみで生まれるのではなく、一般国民の中から体制におもねた集団が生まれ、発展していくのだという。集団は正義を掲げているからなかなか手強い。

今回のコロナ騒動にも現れた自然発生的な自粛警察と呼ばれた人たちである。

彼らを極端な人たちと断じることは出来ないと感じたのは、実際町を歩いていてマスクをしていない人を見かけたとき私自身の気持ちの中にも芽生えたある思いだった。

自分はひょっとして無症状感染者かもしれないから他の人にうつさぬよう息苦しいマスクをしているのに、あの人は平気なのかしらなどという感情であった。

その感情が集団的にまとまり、自粛警察のような形になるのかもと思ったとき慄然とした。ファシズムは私自身にも巣くっていると。

コロナウイルスは憎いけど、自分の奥底に潜んでいる正義と抑圧を併せ持つ感情をのぞき見ることが出来たのは、コロナのおかげかも知れないと考えることにした。

ともあれ、映画評である。以前にも増して、毎晩、Ｎｅｔｆｌｉ

xの海外の映画やTVドラマ漬けの日々で、もはや中毒に近い。そして映像にマスク姿がいないことに懐かしさを覚える。

昨年の秋のことだが、名古屋の友人に誘われ映画館に出かけた。「真実」という日本人監督による映画は、邦画なのかフランス映画なのか何とも言えない。

是枝裕和監督作品は、正直あまり観る気は起きなかった。真面目すぎて、筆者には合わないとずっと思っていたから。是枝監督は、フェデリコ・フェリーニに衝撃を受け、ドキュメンタリーの小川紳介監督や土本典昭監督を尊敬し、小津安二郎の再来とまで言われる作品を世に出し、今や押しも押されぬ名監督であることは間違いないと思う。だが、ヒューマニズム溢れる作風は、歳を重ねてひねくれがひどくなる一方の筆者には荷が重すぎる気がしていた。

「誰も知らない」は、まあまあ抵抗はなかったが、「万引き家族」はタイトルが受け入れられず、実は「真実」もタイトルがベタ過ぎて観る気がしなかった。

久々に会う友人の誘いに、まいいかと乗ってしまったのだ。ところがこれが思いの外、後味のいい晩秋を堪能出来て、大満足だった。そう、映画の中の季節も秋なのだ。

主演女優はカトリーヌ・ドヌーブとジュリエット・ビノシュで母と娘を演じる。母親と娘の物語というのは古今東西数々描かれていると思うが、これがなかなか重いテーマなのである。筆者自身も娘だった時代もあり、母でもある。母親に対しても娘に対しても、一言では言い尽くせない複雑な心理的葛藤と無縁ではない。映画は、母親役をドヌーヴが、気難しくプライド高い往年の女優として演じる。ドヌーブ自身と重なる部分もありそうな役柄だ。自叙伝を出版したからとアメリカに住む娘夫婦と孫を呼び、元夫や現在の愛人や秘書や付き人たちと華やかな記念パーティーをもくろんでいた。かつての当たり役を自分に代わって若く美しい女優が演じるのを見なければならない今を、複雑な気持ちで見つめる母。片や娘は、幼い時から忙しく身勝手で自由奔放な母親を、寂しさ故許すことが出来ず、距離を置いていた。娘の滞在中、様々な諍いが描かれ、女の私などはいちいち理解出来るのだが、男性にとってはどうなのだろうとふと思った。

是枝監督は、家族をテーマにしたものが多いし、監督自身、家族を描くことに興味が尽きないというような事を話している。

その思いが作品によくにじみ出ていると感じた。特に終わり方に。映画は終わり方が最も大事だと思う。

映画の最後に、ドヌーブが玄関を出て、「あら、今日は電車の音がよく聴こえるわ、こんなに音がしてたのね。木の葉が落ちたからよく届くのね。秋のパリが一番好きよ。」そう、聞こえなかった音が聞こえるのだ、今は。届かなかった娘の思いが分かるのだ、今は。

夏の間、青々と茂っていた木の葉は、秋を迎え紅葉し落ちていく。そんな木々を仰ぎながらひとりつぶやく。老いてはいても、ドヌーブの横顔は大変美しかった。

韓国　ポン・ジュノ監督、ソン・ガンホ、世界にはばたく

今年前半は、何が嬉しかったかと言えば、何と言っても韓国のポン・ジュノ監督が渾身の作品をひっさげてアメリカに殴り込みをかけハリウッドの人々をアッと言わせたことだ。

受賞作品の「パラサイト　半地下の家族」はまだ観ていないが、いつかどこかで出逢うだろう。大好きなソン・ガンホが出演していることだし。

「母なる証明」での衝撃的な最後のシーン、「スノーピアサー」のユニークな終末感と監督には毎回驚かされる。何と言っても２００３年に公開された「殺人の追憶」で、ポン・ジュノ監督の映画手法と、主演男優ソン・ガンホの名演技に悩殺された筆者。「グエムル 漢江の怪物」もこのコンビ。このゴールデンコンビが、「パラサイト 半地下の家族」で見事世界デビュー。遅すぎたぐらいだ。韓国サスペンスオタクとしては、自分しか知らない秘密の花園を奪われたような微妙な心持ちでもある。１９９９年公開の「シュリ」（カン・ジェギュ監督）を観て以来、韓国映画の演出手法が大好きで虜となっている身としては、嬉しい限りであった。

×　×　×

—読者から—

〈第7回〉

警備員室直接請求

農律捨丸

関田監督。「シネマ気球」第四十号発行おめでとうございます。四十年、すごいことですね。生まれた子どもが、もう孫を抱いていることだってある歳月、敬服いたします。私もその片隅に席を占めさせて頂きましたが、こちらはあくまで、監督の新作に出演のお声を掛けて頂くまでの、大部屋での待機のつもりです。ひと声掛けてくだされば……。待機中の糊口をしのぐ県立公園の夜間巡回警備員の仕事も七年目になりました。職住近接で理想的な仕事環境のわけですが、今回は腹の立って仕方がない件をお話させてください。

〈報告　一〉「カジノ誘致」です。私の住んでいるY市。ここに開港以来ともいえる大問題が持ち上がっています。全国の皆さんご承知のことですが、幕末の黒船で開港、そして、血の雨と大汗とをかきながら築いてきたY港をIR（大カジノ）につくり変えようという行政サイドの構想が動いているのです。少子高齢の社会で、さまざまな行政サービスの財源を確保するには、この先バクチの寺銭しかない！　これが現在の市長らの考え方。市民生活の安心と安定のためには、どうしても財源確保だ、それには必然的にこのチャンスをものするしかない……。など、まったく営利稼業ご出身の社長市長らしい割り切り方です。これがいかにビジネス感覚とソロバンだけでつくられた構想であるかは、賢明な監督にご説明するのも失礼になりますが、私のように、少しでもこの地に愛着のある、学校教育もここで受けたやからには、まったく頭にくる以外にないことなのです。元々、港が出来たときは、「とま屋の煙り」がちらほらと立つ百戸ほどの小村でした。それが全国の住みたい町ナンバー一になってきてしまった。Y市民は何と思っているか。私ですら、もはや老後になっているこの身を大いにケアしてくれ、安心はないよりあったほうがいい、もっとパンもサーカスも、とは言いません。浸水しかかった老旧船に、いつ投げ捨てられるかもしれない社会制度と一緒に乗り込むことになったとしても、バクチのあがりでわが身の安心を買い込もうとは考えない。バクチは必ず負ける者が出るわけでしょう。人の不幸の上に成立する自分満足の暮らしとは一体何でしょう。行政の長たる者に少しでも郷土を知る学びと、愛を育てるこころがあれば、このような売国的打算構想を持ち出せないはずですが、どうやら現在わが国は一強政権の下、国の長、その大番頭、社長あがり……と、徹底的にY市にとって不幸なアクターたちが顔をそろえてしまいました。百六十一年間の歴史を見ても、実はY村が大開発され、それも巨大遊郭となってサービス産業大はやりとなることもありました。しかし、そのたびに大火がそれを一掃し、水が使えず、疫病がそれをとどめ、大地震が起き、とどめは大空襲と、Y市はいつも大変なのでした。復活してこられたのは、勤勉で健全な正しい方向を市民に示し、そのエネルギーをまとめ、お互いの幸福を高めていこうとするよい指導層たちをその時どきに持てた幸運によるものです。ここが一番の問題。プランは？財源は？我田引水型の打算ばかりによる方針決定。これで「東洋一のY港」の将来へ向けた発展ははかれないですよ。港の入口にデンとそびえる大カジノ！　ああ、疲れますな、監督。まだつづきがあります。

〈報告　二〉一月の夜、暖冬でしたから、小雨の中。IR誘致構想の住民説明会が私の住居のあるH区公会堂でありました。市の広報で知り、私はFAXで参加を申し込みます。まるでネット環境からは外れた暮らしをしていても、動くときは動く。近くのコンビニへ。数日後、市から問い合わせのでんわがあり、私の参加証が送られてきました。さて当夜。会場近くに人垣があるのが見えます。そこは公会堂の楽屋口でした。だが、おかしなことに、その人垣はこちらへ背中を向けるかたちでつくられているのです。かなり屈強そうな背中が二十ほども。その背中に向けて一人の男性がハンドマイクで「あなたたち、もう止めたらどうか」と呼びかけています。もちろん反対派の人。その人に理由をきくと、H市長がこれから来るので、

こうしているのだと。市民にしりを向けたピケットライン。それほど市民にもまれるのがいやで、意見もききたくない市長さんなのです。説明会の内容も報道されているとおりの紋切り型で一つの拍手も一人の笑顔もない、社長による新事業参入プレゼンテーションでした。おまけに、一人ひとりに座るべき座席が決められていて、会場はビデオ撮りされているということでした。おべっか使い進行役による、予定どおりのアリバイづくり説明会が終わり会場をあとにします。いました、いました。あのしり向けピケットライン。えらいものですね。雨の中を、カサもささずに、市長様のお帰りの安全確保と、市民たちからの質問をはね返すために並んだままなのです。（ひょっとすると、どこかの警備会社の私服たちだったかも？）こんなに、「王様」は市民をバカにした、また恐れている人なのでした。私はつい、「恥を知れ」と大声でどなりましたよ。これにはさきのハンドマイクさんも驚かれたようでしたが、私なりの精一杯です。

そしてそのすぐ後に始まった「クルーズ船騒ぎ」。カジノに来る船は少しも宝船ではないことが天下に明らかとなったではないですか。さんざんの災いを乗り越えてきたY市の先輩たちにあの世で叱られそうな思いです。港を愛するこころのない王様たちに牛耳られてしまっているこのY市。数字上のシミュレーションが市民に幸せをもたらしてくれるのでしょうか。現在Y市に住んでいる人はもとより、過去にその縁を持った人たち、これから参加してくる未来の人たち、われわれの町は現在、こんなによたよたなのです。何をするのか、何をしないのか、大事なことを数字に決めてもらう、グローバル資本主義の悪の華きわまれり。ああ、鶴田浩二よ、もう許せん、高倉健よ、お伴します。

〈**報告　三**〉秋の深まった頃、夕方七時まえです。人通りも少ない警備員室の窓のすぐ外に大きな叫び声。「オオーッ、オレはペルシア人だーっ。」三回、四回と繰り返されるそれを無視するわけにはいきません。あわててヘルメットだけかぶり外へまわります。見れば野球場スタンドの入口で、四十代くらいの中背でがっしりとした男が、片手にミカン袋をさげて立ちわめいているのです。飛び出して来た私を見て、「オレが何かワルイことをしたのか？」。「いや、あなたは悪いことをしていない。いないが、それじゃ、ほかの人たちが恐れる。犬の散歩の人もランナーも、誰も来なくなるじゃないか」と私。「ワルイならケイサツをよべ」「では、そうしよう」。相当酒が入っています。困ったなと思いながらも、暴行される心配はないだろうと、しばらく様子見にしました。ところが、一時間ほど経ったところで、インターフォンから、「ケイサツはまだか？」「まだだが、今から来るところだ」。まだお待ちだったのです。警察署へ連絡して、来てもらうことにしました。数分後、警察から「手配したが、少し遅れる」と返答あり。さらに十分後、二台の白いバイクがやって来ました。またヘルメットをかぶり、警察官に説明します。「まだ何もしていませんが、来園者の迷惑には十分になっています」と私。「またか！」どうやらご常連のペルシア人さんだったのです。ポリスの姿を見ると、とたんに柔道の寝技ふうな体勢に入り、自分は酔っていると強調しはじめました。酔っているったって、お国（イラン？）じゃ、酒を飲めば斬首刑になるんじゃないの、日本なら平気っつうのかい。遠い国で、さぞや思い通りにならない生活をお持ちのことども思うけれど、宗教倫理もこうして案外と簡単にくずれてしまうもののようです。この場はポリスにおまかせして、私は通常の巡回警備にもどりました。そして深夜十一時、またしてもこのペルシア人さんを発見。こんどはサッカー場入口あたりでした。しっかりした足早の歩き方で、われわれ（当方はつねに二名で巡回）を遠く避けて、住宅のほうへと急いでいます。今度はおとなしく。後で知ったことですが、この人は一年ほど前に、ちょうど大会開催中の高野連事務局と何かのトラブルを起こし、夜になってから裸になって警備員室のガラス窓にへばりつき、大騒ぎを起こしていた「ペルシア・ヤモリさん」なのでした。やはり、祖国は遠いのです。

こうしてY市は、えらく夢から外れた都市となっています。開港五十年記念の市歌、森鷗外の詞を昔、胸を張って歌った諸君、いまた誇りを新たにしてくれ。また、こんな市長に輝ける市歌をうたわせてたまるものか。そうだ、新作のタイトルは「Y開港番外地」にしてください、関田監督。

新旧映画まとめて紹介

森田洋一

●ウイルス系もの

「コンティジョン」

２０１１年。パンデミックそのものを描く。アウトブレイクが地域的感染に対して、パンデミックは複数の大陸に広がる世界的感染。スティーブン・ソダーバーグ監督が見事な手腕を発揮。時間軸をバラバラにしたような展開が素晴らしい。今の状況を予測したかのような作品。豪華キャスト、マリオン・コティヤール、グウィネス・パルトロー、ケイト・ブランシェット、ジュード・ロウ、マット・デイモンなど。

「アンドロメダ」

１９７１年。ロバート・ワイズ監督の地味な作品。宇宙から病原菌がきて、人類が大変なことにというところは、観ていると何となくわかる。研究室の密閉された空間。何となく低予算のような印象。高校時代、深夜のテレビで見て、一体何、という感じだった。

「カサンドラ・クロス」

１９７６年。ジョルジ・パン・コスマトス監督。ゲリラがウイルスを電車に持ち込む。防護服をきた人の等身大ポスターが当時、すごく印象濃かった。豪華キャスト、バート・ランカスター、リチャード・ハリス、エヴァ・ガードナー、ソフィア・ローレンと国際色豊か。「第三の男」のアリダ・ヴァリ、ベルイマン監督作品常連のイングリット・チューリンなども出演しているので、どこに誰が出ているか確認するのも面白い。

「渚にて」

１９５９年。「招かれざる客」、「ニュールンベルグ裁判」、「手錠のまゝの脱獄」などスタンリー・クレーマー監督。社会問題や人間模様を描くのが上手で、地味な展開に説得力がある。核で人類がほぼ滅びた後の人間模様。グレゴリー・ペック、エヴァ・ガードナー、フレッド・アステア、アンソニー・パーキンスなど、登場人物はわずか5名。ラストが、ちょっと、コマーシャル感あり。

●恋愛もの

「泣きぬれた天使」

１９４２年フランス。劇中、「胸がときめく」、「いっしょにいて心がやすらぐ」、どちらが本物の愛かという問いに対し、「心がやすらぐ」方、愛とは、はじめは小さく、そして育っていき、自分の中で大きな存在となる、こんなセリフが、とても説得力あるように感じられました。舞台は、１９３０年代終わりのパリにある学生の下宿屋。親しみやすい人情ある街並みといったところ。戦争で、人生が一転する。冒頭、若者は気楽でいいといった老人、戦争に行くのも若者、暗に戦争批判をしているようにも思える。原題は、「L'Ange de la nuite（夜の天使）」。この意味は物語の後半になってわかる。前半部分で、人生を謳歌する、後半部分をどのように生きるか問いかける押しと引きの構成がものすごく上手。物語自体、涙する内容。みかけの美しさと心の美しさの対比、光と闇、絶望と希望、といった対比の描き方も見事。主演は、ジャン・ルイ・バロー、「天井桟敷の人々」で有名な俳優さん、「海の牙」での演技の方が印象に残るのは、アンリ・ヴィダル、はじめての大役。天使役は、ミシャール・アルファ、こちらは、この作品でみるのがはじめてでした。原題にも通ずる隠れた傑作と思います。

「堕ちた天使」

１９４５年。オットー・プレミンジャー監督のＢ級サスペンス。冒頭、レストラン給仕役のリンダ・ターネルが美しい。アリス・フェイ、「ワシントン広場の薔薇」「世紀の楽団」「シカゴ」でタイロン・パワーの相手役を演じた女優さん、前半の引きの演技から後半の押しの演技に変わっていくところが、この作品の主軸になっていると思います。片田舎のレストランから、次々に予期せぬ展開に引っ張っていくところは見事と感じます。

●刑務所もの

「死の接吻」

１９４７年。ビクター・マチュア主演の犯罪サスペンス。「サムソンとデリラ」、「荒野の決闘」のイメージとは異なる。ビクター・マチュアはコーネル・ワイルドと何となく雰囲気似てる。この作品、リチャード・ウィドマークのデビュー作。奇妙な殺し屋を見事に演じている。カール・マルデン（「パットン大戦車軍団」）の何気ない脇役も見逃せない。

「真昼の暴動」

１９４７年。きっと、刑務所も

のでは、隠れた大傑作。是非、鑑賞をお薦めする作品。「グリーンマイル」の意地の悪い刑務官、きっとこの作品をヒントにしたと思う。主演バート・ランカスター、監督ジュールス・ダッシン(「日曜はダメよ」)。この作品、刑務所内の人間関係、囚人側と看守側双方から描く、囚人たちの過去がひとつひとつ明らかになる、密告者は誰か、様々な伏線を張りながら、最後の見せ場につながっていく。見事な手法、カメラワーク。

●ビリー・ワイルダー監督の隠れた傑作

「異国の出来事」

１９４８年。マルレーネ・ディートリッヒとジーン・アーサー、二大女優の競演が見所。舞台は、第二次大戦後のベルリン、戦争の後処理を皮肉たっぷりに描いた感じ。がれきの中のベルリンの街並み、ディートリッヒの余裕さえみられるような演技、ジーン・アーサーの堅物でユーモラスな政治家の役どころ。人間味あふれる作品となっている。

「熱砂の秘密」

１９４３年。フランチョット・トーン主演、「ベンガルの槍騎兵」、「南海征服（戦艦バウンティ号の叛乱）」など３０年代のハリウッド映画で名脇役を演じた。少し線が細い感じの二枚目俳優という印象。相手役に「イヴの総て」のアン・バクスター。舞台はロンメル軍団が攻めてくるアフリカ。冒頭の戦車が砂漠を走っているシーン、観客を画面に引き込むようなつかみがうまいと感じさせる。アフリカでのイギリスとドイツ・イタリアの戦いが背景にある。スパイものなので、緊迫した雰囲気の演出がまたよくできていると思う作品。

「地獄の英雄」

１９５１年。カーク・ダグラスがスクープに恵まれない、片田舎の新聞記者を演じる。ちょっと悪そうな雰囲気の演技が非常に、味があると感じさせる。ストーリー展開、これはちょっとあり得ないというほどの、野次馬根性を大げさに描いた作品。笑いをさそいながらも、かなり真正面から、ジャーナリズムのあるべき姿を、作品の中で主張している感じ。観た人によって、賛否が分かれると思われる。

●ニール・ジョーダン監督

「グレタ」（２０１８）という作品をみて、予期できない展開、押しと引きのかけひきの連続、大変興味深かった。グレタは、イザベル・ユペール扮する女性版のレクター博士の雰囲気、クロエ・グレース・モレッツが、徐々に追い詰められていく、サスペンス要素満載。監督がニール・ジョーダン、代表作「クライング・ゲーム」をはじめて鑑賞。物語の奥深さ、予期せぬ展開、人間心理などの要素が、すでに完成されていた感じがする。その他、「マイケル・コリンズ」、リーアム・ニーソンがアイルランドの独立運動家を演じ、ジュリア・ロバーツが相手役を名演。

●ロザムンド・パイク出演作

「サロゲート」などを経て、「ゴーン・ガール」の演技が認められた女優。

「エンテベ空港の７日間」

２０１８年。ジョゼ・バジーリャ監督。テロリストの一人を演じている。この作品、過去に何回か作られている。エンテベの勝利をオールスターキャストで描き、「特攻サンダーボルト作戦」が救出劇中心に対し、本作品は、ドキュメンタリータッチで、時系列に出来事を描いている。

「プライベート・ウォー」

２０１８年。マシュー・ハイネマン監督。実在したフリージャーナリストを体当たりの演技で、迫ってくる感じ。記者クラブの情報を一切信じず、自分の信念を貫く姿が素晴らしい。一人の人間目線からの戦いを取材することから、メッセージ性も、説得力がある。

●２０１９年公開作

「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド」

クエンティン・タランティーノ監督。映画ファンに贈る作品的。コニーと聴いたら、コニー・ステイーブンス、「ハワイアン・アイ」の女優、ディーン・マーチン、サイレンサーシリーズ、「ＦＢＩ」、エフレム・ジンバリスト・ジュニアの代表テレビシリーズ、ポランスキー、「ローズマリーの赤ちゃん」「チャイナタウン」など、映画好きほど奥行きが楽しめる。ブラッド・ピットとレオナルド・ディカプリオを表裏一体で起用、マーゴット・ロビー、個性的、「アイ、トーニャ」「スーサイド・スクワット」の魅力が出てる。一級品。

ジャーナリズムはどうあるべきか示した「新聞記者」

片桐　公男

昨年、関東地方の「梅雨明け宣言」が出された猛暑の7月29日、家内から「柏へ映画を観に行かないか」と誘われた。こんなクソ暑い午後に嫌だなあ、と思ったが映画の表題を聞いて「暑くても行かなくては」と考え直した。訪れた映画館は、いつもガラガラなのに開始前に満席となり熱気さえ感じられた。私は「こんなことは滅多にないなあ」と、この映画に対する市民の関心の高さに嬉しくなった。

さて本題に入ろう。東京新聞・望月衣塑子記者の著書「新聞記者」を映画化したフィクション映画だが、公文書の改ざん、隠ぺい、マスコミ操作など、国会と国民を愚弄する今の政権を見ているとフィクションとは思えない内容が展開されていった。

若き女性新聞記者の吉岡エリカ（シム・ウンギョン）とエリート官僚杉原拓海（松坂桃李）の対峙と葛藤を描く社会派サスペンス映画で監督は若手の藤井道人。

「東都新聞」記者の吉岡エリカに匿名の機密文書がファックスで送られてくる。その表紙にはひつじの絵が描かれていて内容は医療系大学新設を巡るものであった。（映画を観ていて安倍政権の加計学園獣医学部開設を連想していた。）内閣調査室に出向中の杉原のもとに、かつての外務省上司の神崎から電話が掛ってきた。内容は「一杯やろう」との誘いだった。尊敬する元上司の誘いに喜んで出かけるが、杉原はその席で神崎から意外な話を聞かされる。心配した杉原は数日後神崎に電話をするが、神崎はビルの屋上から投身自殺をしてしまう。

一方、機密文書のファックスを受け取った吉岡は、その真実を追求すべく社の上司陣野に相談するがつれない返事しか返ってこない。そこで、国会周辺や官庁街で官僚を待ち伏せて真相を聞き出そうとするが、その壁は厚く困難を要する。

神崎の死をテレビニュースで知った吉岡は、神崎の通夜に参列した際に杉原に偶然出合う。葬儀後吉岡は神崎家を訪ねて神崎夫人に面会を求めるが当初は拒否される。そこで、ひつじの絵を見せると夫人は態度を変えて神崎の書斎に吉岡を案内する。神崎が使っていた机の引き出しからひつじの絵がついた例の機密文書の原本とみられる文書が出てくる。ファックスで送られてきたものと一致する。（映画を観ているものは、「これで神崎の自殺の原因はハッキリした」と思うが・・・。）

これで記事を出そうとするが、吉岡の上司陣野から「ウラが取れなくては記事にはできない」と言われる。子どもが生まれたばかりの幸せいっぱいの家庭を持っていた杉原は、事件への関わりと家庭の板ばさみに悩むが、新聞掲載にあたり「自分の名前を出してもいい」と苦渋の決断をする。

医療系大学設置の闇をスクープした東都新聞は、吉岡記者の奮闘と杉原の上司の死を無駄にさせないという決断からついに発行される。慌てた内閣調査室は情報操作や吉岡を脅迫するが、東都新聞につづいて大手紙も報道、追随したため止めることはできなかった。

一方、記事掲載後杉原は上司の多田智也から呼び出され「外務省に移り海外へ行って今回のこと忘れてこい」と宣告される場面で映画は終わる。

映画を観終わり私は、今治市に建設された「加計学園」の獣医学部新設事件と米政府の情報隠しを追求したアメリカ映画「ペンタゴン・ペーパーズ」（スティーブン・スピルバーグ監督）を思い出していた。

権力者が自分たちに不都合な真実を覆い隠すというのはいつの時代、どの国も同じだと思った。故にジャーナリストは、鋭い嗅覚を働かせ権力の乱用、横暴とたたかい真相究明に全力を挙げなければならない。「ジャーナリズムとは、どうあるべきか？」そのことを明快に示してくれた。同時に日本の民主主義を問う秀作であった。

冷房の効いた涼しい映画館から外に出ると、夕日がガンガン照り付ける猛暑が待っていたが、「観にきてよかった」と、額に流れる汗を拭っていた。（２０１９年８月記す。）

後日記　２０２０年３月、第43回日本アカデミー賞授賞式で「新聞記者」が最優秀作品賞、同主演男優賞（松坂桃李）、同女優賞（シム・ウンギョン）の３冠を受賞したことを知った。因みに同賞での３冠受賞は、第26回の「たそがれ清兵衛」（２００２年山田洋次監督）以来という。

特集

コロナ禍のなかで

少林寺拳法シニア流山健康クラブ

8月になると思うこと

石井宏明

今年の前半はコロナに揺れた日々であった。

まるでSF映画を観ているような、目に見えない異星からの敵と戦っているように思えたのは私だけではないと思う。

この号が発刊される頃にはまた8月15日が巡ってくる。しかし年を経る毎に8月15日の記憶、いや戦争の記憶は風化しつつある。

いつだったか？　こんな話を聞いた。ラジオで聴いたのか雑誌で読んだのか記憶は定かではないが偶々電車の中で若い男女の会話をそれとなく小耳に挟んだ人がいた。

その会話の一部は「日本はアメリカと戦争をしたんだって？」「B29って何の栄養剤なの？」

彼はそれを聞いて愕然としたそうである。

私も信じられない思いがした。

今はそんな時代になったんだと実感した。

世界各地で紛争が起きている現実ではあるが幸いにも日本は表面上平和を謳歌している。飢餓で日々命を削っている国民がいる国がある反面、日本は飽食でテレビでは大食い番組が幅を利かせている。

現代の若者はゲームという仮想空間の中で戦争と向き合っているが実体験は皆無である。かく言う私も戦地に赴くなど、直接戦争に関わったことはない。

ただ間接的には大いに戦争に影響を受けた世代である。

父は東京の千住で質屋業を営み、家には二人の女中さん（今で言うお手伝いさん）までいた。

私はと言えば当時は誰でも望めば入れたとは言えない幼稚園にも通わせてもらい、それなりの生活を送っていた。

そのうちに戦況が緊迫して埼玉県の父の郷里に強制疎開の已むなきに至った。

母は田舎の生活にはどうしても馴染めず、農家の親戚に頭を下げて持っていた着物をお米や野菜と物々交換してもらう生活を余儀なくさせられた。

浅草生まれで気位の高い母にとって、かなりの精神的苦痛のようであった。

私がまだ五歳か六歳位の頃である。

戦後東京に戻ってからの生活は一変し、育ち盛りの子供4人を抱えての一家の暮らしは楽ではなかったと思う。幼心に戦中、戦後の記憶は断片的な言葉として私の脳裏に刻みこまれている。

空襲警報、防空壕、戦闘帽、軍服、半長靴、ゲートル、特高、赤紙（召集令状）、もく拾い、浮浪児、パンパン、傷痍軍人、闇市、雑炊、進駐軍、身体検査等々、切れ切れに浮かんでくるこれらの言葉の大半は今では死語に近くその意味を知る人も少なくなったと思われる。私にとってその言葉の一つ一つに当時の思い出が蘇ってくる。

何と言っても忘れ難いのは食べ物の記憶である。人間の本能の中で飢えほど根源的な欲望はないと思う。今では考えられぬが当時の東京の一般家庭では食事に出るさつまいもやおからは当り前で、麦ごはんに粟や稗まで炊きこんでいた家庭もあった。小学校の給食ではコッペパンと脱脂粉乳、おかずも何かあったと思うが私は脱脂粉乳がどうしても飲めなかった。表面に浮いている泡、底に沈んでいる粒々、そして独得の匂いに辟易していた私だったが、同じクラスで何の抵抗もなく脱脂粉乳を飲み続けていた級友はすくすくと成長して見上げるほどの身長になった。

もし私があの脱脂粉乳を飲んでいたら、もっと身長が高くなっていたかも？　と今更ながらちょっぴり悔まれる。

さて前置きが長くなったが、数ある戦争映画の中で私の印象に残っている二本の邦画がある。それは毎年敗戦（敢えて終戦とは言わない）記念日の8月15日前後に柏のキネマ旬報シアターで上映される映画『野火』と『ゆきゆきて、神軍』である。

『野火』は言わずと知れた大岡昇平が自身の捕虜体験を元に書き上

「少林寺拳法シニア流山健康クラブ」（代表者＝石井宏明）は、一般財団法人少林寺拳法連盟の管轄下にあり、少林寺拳法の技法のエッセンスを取り入れた手軽な運動により、健康増進を目的として活動しています。流山市立常盤松中学校・武道場で週２回（火曜・木曜、夜７時から１時間半）、流山市コミュニティプラザで週１回（金曜、朝10時から１時間半）練習しています。

げた小説で、１９５９年に市川崑監督によって映画化され、後に塚本晋也監督が自ら監督と主演を務めて話題になった作品である。第二次大戦末期のフィリピンレイテ島、日本軍の敗戦が色濃くなった中、主人公の田村一等兵は結核を患い、部隊を追い出されて野戦病院に行くが、そこでも追い出され、空腹と望郷の中原野を彷徨する。塚本監督迫真の演技で極限状態の主人公を疑似体験させられる。現地の日本兵たちは現地人たちを殺害し、その肉を「猿」と呼んで口にしていたという。信じられないおぞましい事実がそれとなく画面から伝わってくる。

一方『ゆきゆきて、神軍』は奥崎謙三という過激なアナーキストで稀代のアジテーターと呼ぶべきか、奇才か天才か、正義感の権化か偏執狂か何とも形容し難い一人の人間を描いたドキュメンタリー映画である。監督の原一男はよくもこの人物に密着して撮り終えたものと感嘆する。

「天皇にパチンコを撃った男です。」と豪語する主人公は警察にも堂々と対峙する。

二人の部下を敵前逃亡の罪で処刑したり、当時現地で黒豚、白豚と呼ばれていた人肉を食べたという上官を訪ね歩き、責任を糾明し弾劾する。

その迫力が画面を通してひしひしと伝わってくる。

けして友達にはなりたくない人物であるが、私財を擲(なげう)って戦友の慰霊に現地を訪れたり、時折垣間見せる優しい表情に人間的な魅力を感じざるを得ない。

いずれの映画からも仮想ではない現実の戦争の齎(もたら)すものを否応なしに突き付けられる。

戦争は人間同士の殺し合いである。そして戦争に付随して起きるのは飢えの問題である。

生きていくというのは食べていくと同義である。戦場で人肉を食すというのは、そんな風習や異常な性癖によるカニバリズムとは根本的に異なる。

人間を変えてしまうのが戦争である。

衣食足りて礼節を知ると言うが、死との恐怖にさらされ、人間が極限状態の飢えに直面した時に、社会人としての良識をかなぐり捨てて本能に支配される動物に変わるのである。

コロナ自粛でも日頃経験したことのない不自由な生活を強いられたが、現実の戦争の比ではない。

愛する人を失い、言いたいことが言える自由な社会が失われる。戦争で得るものは何一つない。

ほくそ笑むのは武器商人だけである。

戦争はかけがえのない家族や友人を奪い去り、住み慣れた街を破壊してしまう。失われた人や暮らしは二度とかえってこない。

特攻隊然り、ひめゆり部隊然り、前途有為な若者が可惜(あたら)尊い命を失った。

広島、長崎の原爆や東京大空襲、沖縄戦では無辜の民がどれほど犠牲になったことか。

けして忘れ去られてはならない戦争の惨禍である。正当化される戦争などない。

何としても知恵を絞って戦争を避けることが人間の使命である。

わずかでも戦争を体験した世代は若い世代に語り継ぐ義務がある。

先に挙げた二本の映画は若い人たちに観てほしい作品であるが、私が行った時には観客の大半は私と同じ世代であった。

でもその観客が戦争の愚かさと残酷さを再認識し、後の世代に伝えようとの意識が醸成され高まっていけば不戦の一里塚になると思う。一週間という限られた期間ではあっても、８月15日を中心にこの映画を上映するのは柏キネマ旬報シアターの良心である。

また今年も上映されるなら、私は必ず足を運ぼうと思っている。

完

不朽の名作『ローマの休日』

大築　猛

２０１９年（令和元年）12月、中華人民共和国湖北省 武漢市で「新型コロナウイルス感染症（ＣＯＶＩＤ-19）」の発生が報告されて以来、感染症は世界中を駆け巡り、２０２０年（令和２年）４月９日現在、世界で感染者数１５７万人、死者数９万４、０００人、アメリカの感染者数45万人、死者数１万７、０００人、イタリアの感染者数14万人、死者数１万８、０００人。日本の感染者数６、０００人、死者数１１９人と、どんどん増えていっており全く予断の許されない収束時期もわからない大変な状況にあります。さらに予防薬も治療薬もなく、自由に人と人が近づ

くことを許さない見えない敵に人類にとって今世紀最大の試練に立たされているといっても過言ではないと思います。我々のライフスタイルも一変し、人と人との接触を最大限避けるべく不要不急の外出自粛を余儀なくされています。

そんな折、ニュースで死者数の一番多いイタリアのローマのロック・ダウン（都市封鎖）の光景が映し出されていました。イタリアには年間6、000万人近くもの観光客が訪れるのに市内およびスペイン広場、ヴェネツィア広場、コロッセオに人の気配がありません。「え！こんなことになっているんだ！まるで死の街のようだ」と驚きと恐ろしさを感じました。そして、ふと、名画『ローマの休日』の市街での光景が思い浮かびました。

1952年当時、映画界では無名に近い存在であったオードリー・ヘップバーンをウィリアム・ワイラー監督がヒロインに抜擢し、そしてアン王女を演じたオードリー・ヘップバーンが一躍スターダムにのし上がったことでも知られています。

『ローマの休日』は、1953年にアメリカで封切られフィーバーし、翌年1954年（昭和23年）日本で公開されるや、熱狂的なオードリー・ヘップバーンファンが急増し、多くの劇場で観客動員数のレコードを達成しました。65年経っても、洋画部門の「情熱的な映画ベスト10」に入っており、今でも人気が色あせることはありません。さらにいろいろなところにも大きな影響を与えています。1つ目は、当時新人だったオードリー・ヘップバーンが演じる、チャーミングなアン王女が古代と現在が共存する素晴らしいローマをより引きたててくれたことで観光客が急増。2つ目は、白シャツにフレアスカート、ウエストをぎゅっと締める太ベルトにスカーフといった気高く気品あるファッションは女性の永遠の定番アイテムとなりました。3つ目は、トレヴィの泉近くの美容院でロングヘアをばっさりと切ったショートカットは「ヘップバーンカット」と呼ばれ一世風靡し多くの女性が真似し、日本でも挙って「ヘップバーンカット」の女性が街に出たそうです。

4つ目は、アン王女と新聞記者のジョー・ブラドリーが2人で市内を走り回ったイタリアのピアッジオ社が開発した甲高い音を出すが、可愛いボディの小型スクーター「ベスパ（Vespa）」が大流行し、日本でも愛好家が増えたそうです。5つ目は、スペイン広場のスペイン階段をバックにジェラートを口いっぱい頬張るキュートな王女。このように、ローマの知名度急上昇、観光業界、ファッション業界、美容業界、自動車業界、スイーツ業界に大きな経済効果をもたらしました。

ロンドン、アムステルダム、パリの表敬訪問をこなし、最後の訪問先ローマで、アン王女（オードリー・ヘップバーン）は駐在大使主催の歓迎舞踏会に出席します。これまでの訪問先で任務をこなしていた王女だが、内心では分刻みのスケジュールと、用意されたスピーチを披露するだけのセレモニーにいささかうんざり気味。長い列の賓客との挨拶の最中に、疲れた足を休ませようとヒールを脱ぐ姿を見せるが、ヒールが転げてしまいます。必死に探して履こうとしますがうまくいかず、挙句にはヒールがイブニングドレスの外に出てしまいます。慌てる茶目っ気なアン王女、冷や汗でうろたえる侍従たち。一先ず無事に舞踏会は終了し、就寝の時間になると、侍従たちを前にヒステリーを起こしてしまいます。主治医に鎮静剤を注射されたものの、気が高ぶっているため、なかなか寝つけない。ふと思いついた彼女は、寝室を抜け出し、止まっていた宿舎出入りの3輪トラックの荷台に潜み、こっそり宮殿を抜け出します。夜のローマをぶらぶら歩いていた彼女は、やがて先ほどの鎮静剤が効いてきて、道ばたのベンチにぐったりと横たわってしまいます。そこを偶然通りかかったのが、アメリカ人の新聞記者ジョー・ブラドリー（グレゴリー・ペック）。若い娘がベンチに寝ているのを見て、何とか家に帰そうとしますが、娘の意識は朦朧としていて埒があきません。娘をそのまま放っておくこともできず、ジョーは娘を自分のアパートへ連れて帰り、一晩の宿を提供したのです。

翌朝、アン王女の記者会見会場

に寝過ごしてしまったジョーは、まだ眠っている娘を部屋に残したまま、新聞社へ向かいます。なかなかスクープがとれず、くすぶっているジョーは支局長に遅刻を咎められますが、「アン王女の記者会見に出席してきました」とうそを言います。でも、すぐにバレてしまい、支局長から「アン王女は急病で、記者会見は中止」と書かれた新聞を渡されます。ジョーは、そこではじめて昨晩の娘の正体が、時の人となっているアン王女だと気づきます。アン王女の行動を記事にできたら大スクープになる！ふってわいたチャンスに色めき立ったジョーは、アン王女の特ダネを取った場合の破格のボーナスを支局長に約束させます。ジョーのアパートで目を覚ましたアン王女は、思いがけない事態に驚きますが、お礼を言って街に向かいます。ジョーに借りたお金でサンダルを買ったり、美容院に飛び込んで長い髪を短くしたり、ジェラートを食べたり、ごく普通の女の子のように楽しい時間を過ごします。彼女の後を追ってきたジョーに声をかけられますが、「もう帰らなくちゃ」と立ち去ろうとするアン王女に、偶然の再会を装うジョーの「思いきって一日楽しんだら？」という声に押され、アン王女は宿舎に戻るのを夜までのばすことに決めてしまいます。アン王女の行きたかったカフェでシャンパンを注文するアン王女。お金のないジョーは、友人のカメラマン、アービング・ラドビッチ（エディ・アルバート）と合流することで何とかやり過ごします。アーヴィングに全ての事情を説明したジョー。２人で手を組み「アン王女の24時間のローマの休日」をスクープしようと持ちかける。大スクープ記事で得られる大金に興奮したアーヴィングは、もちろんジョーのオファーを快諾。そこから２人は秘密の取材を開始します。パンテオンの前にあるカフェを出た後に３人が向かった先は、コロッセオ。ジョーがアン王女をスクーター（ベスパ）の後ろに乗せ、カメラマンのアーヴィングが車に乗って２人を後ろから追いかけ盗撮するというスタイルで進んで行きます。盗撮されているとはつゆ知らず、コロッセオの中にも入場し、ローマ観光を満喫するアン王女。そしてそんなアン王女の様子を、ジョーとアーヴィングは取材・撮影し続けていきます。コロッセオを見学した後も引き続き、ジョーとアン王女のスクーター・デートは続きます。アン王女を後ろに乗せ、ローマ市内の名所を見せて案内するジョー。そしてアーヴィングも引き続き、そんな２人を追いかけて撮影し続ける。そして、ジョーが路上でスクーターを止めて離れた時、アン王女は興味本位でスクーターを運転し始めます。フラフラと危うく進んで行くアン王女に気づいたジョーは、慌ててスクーターの後ろに飛び乗り、運転を変わるようにアン王女を説得しますが、自分が運転し続けると言って譲りません。対向車線への侵入、人が歩く路上やマーケットへの突入など、アン王女の暴走運転にローマ市内は大混乱。いよいよ警察が出動し、サイレンを鳴らして２人が乗るスクーターを追いかけます。アン王女が繰り広げた暴走運転の末、結局は警察に捕まってしまいますが、取り調べをことなく終えて警察署から出てきたアン王女とジョーとアーヴィングの３人。それからジョーはアン王女の行きたかった「とある場所」のことを思い出し、アン王女の手を引いてそこへと向かいます。着いた先が「真実の口」。「嘘つきの手は食いちぎられる」とジョーから聞かされたアン王女は、「あなたが手を入れてみて」と言う。ジョーが「真実の口」に手を入れて抜けなくなるという悪ふざけをすると、それを信じたアン王女は必死でジョーの手を引っ張って助けようと叫んでしまう。ジョーが真実の口から遂に手を引き出した瞬間、無傷の手を見て「嘘つき！」と怒りながらも号泣します。この悪ふざけのシーンは、グレゴリー・ペックのアドリブとも言われています。日も沈み、ローマの町に夜がやってきます。ジョーがアン王女を連れて向かった先は、サンタンジェロ城の川沿いで開かれているダンス・パーティー会場。サンタンジェロ城をバックにライトアップされた幻想的な光景は感動ものです。しばしの間、パーティでの楽しいひと時を過ごす２人。ところが、楽しそうに踊る２人は、王室が派遣していた私服警官たちに見つかり、強制的に滞在先へと連れ戻されようとしています。必死に抵抗するアン王女、私服警官に飛びかかるジョー。アーヴィングも加わり、ダンス会場は一気に大乱闘モードへと突入。アン王女までもが乱闘に参戦！ダンス会場にあったギターを掴み、追いかけ

てくる私服警官を打ち叩くというおてんばぶりを発揮。そしてアン王女とジョーは、追っ手から逃れるためにパーティ会場のそばを流れる川へと飛び込み、私服警官たちを巻くことに成功します。無事に岸辺に辿り着いた2人、「さっきは大活躍だったね」「あなこそ」と、大乱闘での互いの健闘をふざけながらお互いを称えあいます。冷たい川の水に体温を奪われたアン王女の体は震えっぱなし。そんな様子を見て温めようとアン王女を抱き寄せたジョーは、そのまま衝動的にキスをしてしまいます。それを抵抗することなく、受け入れるアン王女。つかの間の自由と興奮を味わううちに、いつの間にかアン王女とジョーの間には強い恋心が生まれていたのです。初めてキスを交わした2人はその後、「とりあえず濡れた服と体を乾かそう」と、ジョーの家に向かって歩き始めました。ジョーの家に戻り、服を乾かしていると、ラジオから「アン王女の容態は依然不明」と流れてきました。帰る決意をしたアン王女はジョーに「もう、いかなくては」と伝えました。夜は更け、とうとう別れの時が迫ってきます。アン王女を乗せ、指示される場所へと車を走らせるジョー。目的地に到着し、しばらくの沈黙の後「どう別れていいか分からない」と口を開いたアン王女。そして「私が降りたらすぐにここを去って！私も絶対振り向かないから」とジョーにお願いします。苦い表情を浮かべながらも、ジョーはアン王女のお願いに素直に頷き、そして最後のキスを交わした2人は、暗闇の先へと続くそれぞれの「元の世界」へと戻っていきます。アン王女が無事に戻ったことを確認した王室は、「アン王女、病気から回復」とメディアに伝え、キャンセルしていたアン王女の会見を一日遅れで開催することにしました。会見を取材すべく集まった数多くのメディアの中にはもちろん、ジョーとアーヴィングの姿がありました。記者団の中に立つ2人の姿を見つけたアン王女は一瞬とまどいを見せ、少し複雑な表情で会見を始めます。会見中、「これまでに訪問した中で一番良かった都市は？」という質問を受けたアン王女。「どの都市もそれぞれに良いところがあり……」と、すべての都市に対して平等なコメントで返答をしようと試みるも、少し思いとどまり、「ローマです。何が何でも、ローマが一番です」と胸を張って言い切ります。一方、ジョーはこの会見に臨む前、新聞社の支局長とひと揉めしていたのです。ジョーが約束していた「大スクープ」を期待していた支局長は、会社に出社するなり「早くネタを見せてくれ」とジョーに詰め寄ります。ところが、ジョーは「記事は何もありません」とシラを切ります。ジョーはアン王女のスクープは世に出さないと決心していたのです。記者会見を終えたアン王女は、各メディアの記者1人1人と挨拶を交わしていきます。順番の訪れたアーヴィングは、「ローマの思い出に！」と、盗撮していた「王女のローマの休日」の写真が入った封筒を手渡しました。封筒を開け、パーティ会場でギターを振りかざして応戦する自分の姿を目にしたアン王女は、少し驚きながらも、嬉しそうにその写真を受け取りました。そしてアン王女はついにジョーの元へ。この時初めて会ったかのように、「お会いできて光栄です」と挨拶するジョーに対して、「私こそ」と答えるアン王女。手を握ったまま数秒間、瞳で無言の会話を交わす2人。この瞬間が本当の本当に、2人にとって最後のひと時となるのです。アン王女の会見が全て終わり記者団が解散していく中、ジョーだけはなかなかその場を離れることができません。出口付近で名残り惜しそうに立ち止まり、アン王女が立っていた場所をもう一度だけ振り返って見ます。そこにはアン王女の姿も誰もいません。静まりかえったステージを目にしたジョーは、現実を受け止めるかのように、静かにその場をあとにするのです。

　永遠の妖精！オードリー・ヘップバーン。深く輝いた黒い瞳、凛とした魅惑的な美しさからあふれる多彩な顔と絶妙な演技がマッチし繰り広げられた『ローマの休日』の名シーンの数々は、多くの映画ファンの脳裏に強烈に焼き付けられており、不朽の名作と言われるゆえんです。彼女の出演作品『麗しのサブリナ』、『戦争と平和』、『昼下りの情事』、『ティファニーで朝

少林寺拳法シニア流山健康クラブ

食を』、『シャレード』、『マイ・フェア・レディ』、『おしゃれ泥棒』も私のお気に入りです。残念なことは、彼女は1993年63歳の若さでこの世を去りました。

見ようと思うだけでも大変です。

柳橋和郎

2019年はできるだけ映画館に行こうと思っていましたが、母親の介護でなかなか難しかったです。それで、行きたいなと思っていたけれど行けなかった映画を月別に並べてみます。

1月

①「YUKIGUNI」

故郷、山形県酒田市で92歳の今も現役バーテンダーとして働く、カクテル「雪国」を考案した井山計一のドキュメンタリーです。カクテル雪国は見た目も美しいです。

②「世界一と言われた映画館」

淀川長治が世界一と評した映画館が酒田にありました。「グリーンハウス」この映画館が火元で酒田大火災が発生し、燃えてしまいました。上記雪国の井山計一も出演しコメントしています。ドキュメンタリー。

③「岡本太郎の沖縄」

芸術は爆発だ！の岡本太郎の感性は計り知れない。作品を見ると。太陽の塔も、渋谷の井之頭線駅通路のどでかい絵も、いったいなんなんだ、これは！と初めて見たときは思いました。

沖縄の中にこそ日本の原点があると、そして自分自身を再発見したドキュメンタリー。

2月

④「猫とじいちゃん」

妻に先立たれた元教師の大吉と猫の日々の暮らし。

動物写真家の岩合光昭初監督。監督の希望で立川志の輔出演。2019／2／22猫の日に封切り。ということで猫の行動や表情の撮影がすばらしいのではと思います。

⑤「シミラーバットディファレント」

俳優の染谷将太が監督、脚本、出演のショートムービー。似ているようで違う、すれ違い、お互いがお互いに感じる気持ち。男女二人の人間関係。映像を見るとなんとなくひきこまれていく作品です。

3月

⑥「マイ・ブックショップ」

設定は1959年。未亡人のフローレンスが夫との夢を実現。イギリスの本屋がない小さな町で、本屋をオープン。彼女を良く思わない地元有力者の婦人との葛藤。40年間ひきこもり、本を読むだけの老紳士との出会いもあります。

⑦「ヨーゼフ・ボイスは挑発する」

20世紀を代表する芸術家、ヨーゼフ・ボイスのドキュメンタリー。画像の芸術家、ナム・ジュン・パイク、なんでも布でおおってしまう芸術家クリスト、無音の演奏「4分33秒」のジョン・ケージ、エンパイアステートビルの最上階8時間以上もただただ撮影したアンディ・ウォーホルの「エンパイア」、小野洋子のいろいろ考えさせられる作品群。ヨーゼフ・ボイスやこういった現代芸術作品は岡本太郎の作品どうよう見ると、これはいったいなんなんだといつも思います。

⑧「小さな声で囁いて」

結婚を考え始めた遼に対し、乗り気じゃない沙良。互いの溝を埋めようとした3泊4日の熱海旅行でも二人の心はすれ違う。漠然とした将来への不安から未来像を描けない男と女。それぞれの「愛」と「I」の行方・・・

以上、映画紹介より抜粋。熱海での撮影がみそのようです。

4月

⑨「ヒトラーVSピカソ　奪われた名画のゆくえ」

ナチスドイツに奪われた美術品は60万点にのぼると言われ、現在でもまだ10万点がどこにあるのか不明だそうです。ピカソ、ゴッホ、シャガールらの作品を退廃芸術だとして純粋なアーリア人による写実的で古典主義的な作品をよしとしヒトラーは芸術を統制しようとしました。そして故郷に美術館を建設する野望を抱いていました。

⑩「ビル・エヴァンスタイム・リメンバード」

自分が一番好きなJAZZピアニスト。交通事故で亡くなってしまったベーシスト、スコット・ラファロとの演奏は綺麗な音の中に緊張感がありすばらしいです。

ビル・エバンスにとってスコット・ラファロを失ったことは、ビートルズのジョンレノンがいなくなったと同様に音楽を創造するうえでの大打撃でした。

ビル・エバンスは薬とも縁が切れず体もボロボロ、なおかつ長年癌におかされていましたが、治療を拒否し、世界で一番時間がかかった自殺とも言われています。生涯をおったドキュメンタリー。51歳で死亡。

5月

⑪「**嵐電**」

撮影は京都市、東映京都撮影所、京福電気鉄道（嵐電）および嵐電界隈に住む人々の協力を経て行われ嵐電にまつわる3つの恋愛模様を描いた。

1ノンフィクション作家の男性
2太秦撮影所近くカフェで働く女性
3修学旅行のために京都に来た青森県の女子高校生

以上ウイキペディアより抜粋

⑫「**初恋　お父さん、チビがいなくなりました。**」

人気漫画「お父さん、チビがいなくなりました」を倍賞千恵子、藤竜也、市川実日子のキャストで映画化。3人の子どもを育て上げ、猫のチビと穏やかに晩年を暮らしている勝と有喜子の夫婦。夫の勝との暮らしは静かで平穏ではあったが、妻の有喜子にはある不安があった。そんな思いから有喜子は娘の菜穂子に「お父さんと別れようと思っている」と打ち明ける。そんな時、猫のチビが姿を消し、チビを心の拠りどころにしていた有喜子の気持ちは追い詰められていく。映画.comより。最近よくある？熟年夫婦問題です。

6月

⑬「**旅のおわり世界のはじまり**」

ウズベキスタンでロケ、前田敦子が熱演。心を閉ざしていたヒロインが、ウズベキスタンという日本とは文化の違う国でのいろいろな出会いで心に変化が。見ると自分の心にも前向きの変化があるのではと期待します。

7月

⑭「**浜の記憶**」

東宝の専属俳優だった加藤茂雄の俳優生活70周年を記念した、93歳にして初めての主演作品…これを見て自分も頑張らねば！自分はまだ若い？

93歳の漁師と20歳の娘が織りなす、不思議なひと夏の「道行き」…これはおじさんの夢である！

8月

⑮「**アートのお値段**」

アートの価格を題材にアート市場の裏側に迫るドキュメンタリー。名画ってなんであんなに高いのだと良く思います。

⑯「**ジョアン・ジルベルトを探して**」

ボサノバを作った一人、ジョアン・ジルベルト、ギター、ボーカル。

元奥さんのアストラット・ジルベルトとスタン・ゲッツと作った「イパネマの娘」は有名。

原作はドイツ人ジャーナリストのマーク・フィッシャーが２００８年から姿を見せなくなった本人に会うためにブラジルを訪れるが会えず、その顛末を書いた本を発行。但し本発行の一週間前に自殺。フィッシャーの夢を実現させるためにブラジル音楽をこよなく愛するジョルジュ・ガショ監督がメガホンを取る。

9月

⑰「**ブルーノート・レコード　ジャズを超えて**」

ジャズの名門レーベル「ブルーノート・レコード」設立80周年を記念して製作されたドキュメンタリー。ＪＡＺＺといえばアメリカですが、ブルーノートを設立したのはドイツ人のアルフレッド・ライオン。ＪＡＺＺの名盤を数多く作り、ＪＡＺＺの歴史からは切っても切れない存在です。またジャケットのデザインも傑作が多いです。歴史あるブルーノートに対し現在のＪＡＺＺを代表するレーベルにＥＣＭがあります。ブルーノートとは音楽的に１８０度違いますが、こちらもドイツ人のマンフレート・アイヒャーが創立しました。ＪＡＺＺのビッグレーベルを二人のドイツ人が作ったのは興味深いものがあります。そしてＥＣＭのジャケットも素晴らしく、芸術の域にあります。

⑱「**アルツハイマーと僕**」

アルツハイマーは他人ごとではいられません。グレン・キャンベルはグラミー賞をはじめとする数多くの受賞歴を誇るカントリーミュージシャン。日本では「ジェントル・オン・マイ・マインド」や「ウィチタ・ラインマン」等シンガーとして有名かもしませんが、ギターの腕前はすごく、ボビー・ダーリン、リッキー・ネルソン、ディーン・マーティン、ナット・キング・コール、モンキーズ、ナンシー・シナトラ、マール・ハガード、ジャン&ディーン、エルヴィス・プレスリー、フランク・シナトラ、フィル・スペクターらとレコーディング、天才ブライアン・ウィルソンの代役としてザ・ビーチ・ボーイズのツアー公演に参加したり名アルバム『ペット・サウンズ』などのレコーディングにギターで参加。

アルツハイマー病と診断されたグレン・キャンベルは、ギター演奏を断念せざるを得ないとの忠告を医師から受けましたが、グレンと彼の妻は２０１１年、病を公表し、家族とともに「さよならツアー」を行いました。２０１７／８／９　81才で死去。

10月

⑲「**最高の人生の見つけ方**」

新国立競技場を完成前に見ようと行った時この映画のポスターを千駄ヶ谷の駅で見て、見たいなと思いました。

吉永小百合、天海祐希が共演、余命宣告を受けた二人が入院中の少女が書いた「死ぬまでにやりたいことリスト」を見てそれを実行し、今まで気づかなかった生きる楽しみと幸せを見つけて行きます。

⑳「**普通は走り出す**」

映画を観る意味、作る意味とは？　自分にとっての映画とは？　悩める映画監督、平成最後の自意識地獄巡り・・・映画のチラシより。こんな映画を見ないわけにはいかない。

11月

㉑「**バウハウス百年映画祭**」

バウハウスに関連するドキュメンタリ６本上映。

建物のデザインとかデザインに関するものを見ていると、バウハウスと言う言葉がでてきます。バウハウスとは、第一次世界大戦後にドイツ中部の街ワイマール共和国に設立された、美術学校でナチスの弾圧により１９１９年からの14年間で閉校になります。工芸、写真、デザイン、美術、建築など総合的な教育を行っていて、今でもさまざまな分野に影響が。

ここまでで11月、絞り込んで21本、ドキュメンタリーが多くなりました。但し見たい映画は毎月他にもたくさんあり、見ようと思うだけでも大変です。

12月

４年間介護していた母親が亡くなりました。98才でした。

12月は見たかった映画ではなく、母親と行った映画の思い出を書きます。母親はディズニーのアニメは全部子供に見せると決めていたので「ダンボ」、「わんわん物語」、「白雪姫」や「ピノキオ」等、小学生の時は良くつれられて見に行きました。最後に見たのは「１０１匹わんちゃん大行進」でした。渋谷パンテオンで見ました。思い出します。家は貧乏だったのでお金がない中、よく連れて行ってくれたと思います。亡くなった母親は自分とは違い、明るい性格で話好きでしたので、天国ではおおいに楽しんでいるのではないかと思います。

２０２０年は新型コロナで映画館が営業できなくなり、ミニシアターの存続があやぶまれましたが６月後半からやっと営業が始まりました。さて時間を見つけてぼちぼち行きますか。

太平洋戦争についての一考察

杉山　昇

何事でも将来に展望が開ける様子がないまま事を運べばおそらく成功はなかろう。今次の太平洋戦争はそのことを如実に物語っているのではないか。定かではないが戦争に入る前に某元帥は「２年間は暴れて見せる。その間に何らかの形で休戦をしてもらいたい」と述べた。そんな虫のいい話はない。己の武器弾薬が尽きるころに休戦だの講和だのと言っても相手がやられっぱなしでいる訳がない。開戦後３年目に入った１９４３年からは、当然ながら米英軍の本格的

な反攻を受けて戦況は不利になってきた。補給路の確保がなく戦闘物資の不足に加え、司令官による指揮のミスが敗戦に拍車を加えるケースも出てきた。主たるものに1944年のビルマ戦線のインパール作戦がある。凄惨な失敗を語るがごとく今も森林には日本兵の遺骨が散乱しており白骨街道と言われる。この作戦は、牟田口廉也（むたぐちれんや）（陸軍中将）が指揮した。戦後は、自己弁護活動を行うようになり、インパール作戦失敗の責任を問われると、「あれは私のせいではなく、部下の無能さのせいで失敗した」。また、英国のある高官から「日本軍はとても強かった」と言われ、それだけで「私のあの作戦は間違いではない」と頑固に自説を主張していた。また、命令と称して多くの若者を死に追いやり、己は戦後ぬくぬくといい思いをした輩がどれだけいるか。

戦争においては、いかに優れた決断でもそれは必ずや人を殺すことには間違いない。故にいかなる良い決断でもそれは良いとは言えないと思う。

太平洋戦争における1941年の真珠湾攻撃から1945年の敗戦に至るまで、日本側と連合国側、その双方の指揮官や司令官、兵士たちの重要な決断を中心に描き出すノンフィクションドラマがある。「アニメンタリー　決断」（タツノコプロ。九里一平・監督。1971・4・3～9・25、日本テレビ系26回放映。30分番組）である。

「アニメンタリー」とは、「アニメーション」と「ドキュメンタリー」を合わせて作られた造語である。戦争状態における将官達の決断の時を描き、それがいかなる教訓をもたらすのかを訴えた。「真珠湾奇襲」から「マレー沖海戦」「加藤隼戦闘隊」「バターン・コレヒドール攻略」「シンガポール攻略」「ミッドウェイ海戦」「潜水艦 伊-168」「第一次ソロモン海戦」「山本五十六の死」「キスカ島撤退」「ラバウル航空隊」「マリアナ沖海戦」「特攻隊誕生」「レイテ沖海戦」「硫黄島作戦」「連合艦隊の最期」などが描かれた。

作品の一つひとつを詳述すると戦記読み物となってしまい、本稿の趣旨から逸脱してしまうので、このなかから「キスカ島撤退」を簡単に記す。

キスカ島撤退作戦は、1943年（昭和18年）5月27日から7月29日に行われた、北部太平洋アリューシャン列島にあるキスカ島からの守備隊撤収作戦のことである。1943年5月12日、アメリカ軍は日本軍の支配下にあったアリューシャン列島のアッツ島に上陸。兵力の差はアメリカ軍の11、000人に対して日本軍は2、650人と4分の1で、補給も増援も見込めず日本軍は必死の抵抗を続けたが、5月29日～30日、司令官山崎保代陸軍大佐以下約300名余の兵士による〝バンザイ突撃〟により日本軍守備隊は玉砕した。アッツ島は陥落し、キスカ島にいる守備隊（陸海軍あわせて6、000名余）は制海・制空権を完全にアメリカ軍に握られ孤立した。日本軍守備隊は、退くに退けず、待つのは死か降伏かという状態になってしまった。日本軍は第一期作戦として潜水艦による撤退作戦を実行した。傷病兵等約900名を後送したが、3隻の潜水艦を喪失して失敗に終わった。

潜水艦の代わりに立案された水雷戦隊（機雷・魚雷・爆雷などを使った水雷戦を行う部隊の一つ）による第二期作戦は、この地方特有の濃霧に紛れてキスカ湾に突入、守備隊を収容した後に離脱を計るという計画だ。アメリカ艦と誤認するように撤収艦隊の阿武隈、木曽の3本煙突の一本を白く塗りつぶして二本煙突に見えるようにしたり、駆逐艦に偽装煙突をつけたり偽装工作を万全にしての出撃であった。霧が晴れてしまい突入を断念すること4回、燃料も少なくなって一度は手ぶらで幌莚島へ帰投した。第一水雷戦隊司令官の木村昌福少将への批判は凄まじかった。この批判を意に介せず阿武隈の舷側から釣りをしながら濃霧が発生するのをじっと待っている様子がこのアニメからよく伺える。再び7月29日霧の濃いなか艦隊を出撃させ、数次に分け守備隊員約5、200名を大発（日本海軍の上陸用舟艇）のピストン輸送によってわずか55分という短時間で収容した。撤収部隊は浮上航行中のアメリカ海軍の潜水艦と近距離で遭遇したが各艦とも偽装工作を行っていたため、米潜水艦は撤収部

隊をアメリカ艦隊と誤認したらしく、素通りしていった。撤収艦隊は7月31日から8月1日にかけて幌莚に全艦無事に帰投した。ここに戦史史上極めて珍しい無傷での撤退作戦は終了した。

◇

世界の大国を相手に戦った日本軍、戦いにおいて素晴らしい決断もあれば〝欠断〟もあった。〝忘れ物〟、〝落し物〟の多い戦争ということは間違いないと思う。展望もない戦い――。不思議なのは、連合軍がヘトヘトになっている日本に原爆まで投下し多くの民間人まで殺して日本から降伏の二文字を剥ぎ取ったことだ。その意図がわからない。

偶然にも英国、フランス、オランダなどの東南アジアにおける植民地支配も、日本の進出によって大きな打撃を受けた。戦後、これらの国は植民地支配の回復を目指したが、これを実現することはできなかった。日本はアジアの解放を意図したか否かに関わらず、結果的にアジアの植民地からの独立を推進したことだけは事実である。

イギリスの歴史学者アーノルド・J・トインビーは次のような言葉を残している。「第2次大戦において、日本人は日本のためというよりも、むしろ戦争によって利益を得た国々のために、偉大なる歴史を残したといわねばならない」

Outsiderの映画あれこれ

門屋大二

今年もまた関田さんのご好意で「シネマ気球」への投稿のお誘いを受け映画outsiderを自覚しつつも映画について考える機会を頂戴しましたことに御礼申し上げます。春先から毎日報じられている様にＣＯＶＩＤ－19の蔓延で世界中が大騒ぎの下その対策として種々の制約で不便な生活を強いられ、ひいては日常行動変容が求められている。これは「自然を尊び共存することを忘れかけた人間社会の思い上がり」に対する自然からの手厳しい警告の様にも映る。今や文明社会、複雑に変異し続け対応がますます難しくなるＶＩＲＵＳを育てる揺り籠になっているとさえ言われている。３密回避等自粛が続き劇場行きは皆無ながらもＴＶ映画を織り交ぜてoutsiderの視点で映画について考える時間が増えた様に思う。何時もの様に慌ただしく締め切り間際の執筆で発散型・冗長系であることをお許し願いつつ我が「映画観」を思いつくままに書かせて頂きます。

英文の映画脚本Ｔｅｘｔを読むこと

映画の脚本Ｔｅｘｔを読んでその口語表現に注目することは言語に興味を持つ者にとって大きな魅力である。短い言葉に凝縮されたなにげない口語表現に込められたニュアンスまで理解出来た時脚本家の意図にも思いを馳せ面白味が増幅する。幸いにして最近では脚本Ｔｅｘｔを入手して気になる台詞を丹念に確認することが出来る。ＣＯＶＩＤ－19が蔓延し不要・不急の外出自粛を強いられているこの状況下で自宅で脚本を読みその表現に「なるほど」と思い当り快哉と膝を叩いたことも屢々である。巣篭り状態で「味わった」この様な記憶を「我が映画メモ」に沿って辿って見たい。

①「**ポルトガル、夏の終わり**」

この映画はポルトガルの幻想的で神秘的にも見える風景を誇る世界遺産の街シントラを舞台に展開する「夏の休暇中」の家族物語。家族のそれぞれの興味深い人生が紹介される。「写真では美しい風景を表現出来ない」と言う意味で「Don't do it justice」と言う台詞。「実物より劣る・実物通り表現出来てない」と言うさりげない台詞で実際の美しい風景を強調している。繰り返し声に出している台詞である。

②「**デンジャー・クロース 極限着弾**」

１９６５米国がベトナム戦争に参入。各国が参戦する中豪州も参戦。この映画はオーストラリアが派遣した戦闘未経験の若者の戦闘振りを伝える豪州から見たベトナム戦争が主題。１０８人のオーストラリア兵が２０００人の南ベトナム解放民族戦線と戦った伝説の「ロングタンの戦い」と参戦各国の複雑な事情を伝えると言うテーマが展開する。死闘の渦中追い込まれた若者兵が「死ぬなら酔っぱらって」と言う程の意味合いで「If your number is up, may as well get a buzz on」との台詞。余命日数を数える「number」がこの場面で使われると一際深刻に響く。

③「**オーシャンズ８**」

女性の犯罪プロフェッショナル集団が奇想天外な計画を立て１億

５０００万ドル相当の宝石を強奪する犯罪を描く。優れた犯罪才能を持つ盗人仲間が集まりセキュリティー上要塞の様に堅固なメトロポリタン美術館に潜入し女優の身に付ける宝石を盗む。５年間獄中で過ごしたDebbie Oceanが仮釈放担当官と交わす会話で慕わしく思いつつも詐欺師の兄を悪人と認識しての述懐「Um I fell for the wrong person.」（私は悪い人に入れ込んでしまった）と反省を込めて呟く台詞は屡々訪れたＮＹメトロポリタン美術館の雰囲気を思い浮かべつつ我がメモ帳に朱記した台詞である。

④「オフィシャル・シークレット」

２００３年３月侵攻の正当性が疑問視されつつも米英主体の連合軍がイラクに侵攻開始。大量破壊兵器の有無が国連でも焦点となった事実。米政府の情報工作活動が凄まじくその実態が英国情報官を通して明らかにされた事に端を発し機密事項を守る側と暴く側の「激戦」が進行する。偏見に基づく情報が如何にも尤もらしく報道されると言う危険性に思いが及ぶ。且つてウォーターゲート事件の密告者に付けられた綽名ディープスロートが辿った数奇な運命を思わせる。英国政府職員が義憤に駆られて「info that could give U.S. policymakers an edge」と述懐する。米国政策立案者が好都合な情報のみを報道する実情を嘆く台詞。力任せの情報戦を辿ると不安定な政治世界の危うさが見えて来る。列強の国家意思が先走るばかりで根拠の薄い主張を展開し原因を相手の責任とする情報戦の怖さに思いが至る。昨今の米中の新コロナをめぐる情報戦のデジャブ―とも映る。

原作の魅力

「マイ・ボディガード」

（ＴＶ映画劇場）

遥か往時我がサラリーマン現役時代成田―ＪＦＫ間の頻繁な往復の長時間の機中で米国版文庫本を読むことの楽しみを味わったものである。Ａ・Ｊ・クィネルの原作「Man on Fire」を読んだのは米国人の仕事仲間の薦めに因る。その平易な英文とスリルとサスペンスを満載したストーリーの展開に長時間の飛行の疲れを忘れ読み耽ったことを思い出す。

映画はメキシコが舞台でボディーガードのクリーシーと誘拐マフィアが繰り広げる「復讐戦」が主題。裕福な家族は当たり前の様に誘拐のターゲットにされており、ボディーガードを雇うことが常識であり、それが誘拐保険に加入するための条件になる程「誘拐」が頻発していた。会社経営者サムエル・ラモスは誘拐保険更新のために、新しいボディーガードを雇わなければならなかった。雇われたのはかつて米軍の対テロ暗殺部隊に所属していたクリーシー。友人がアルコール中毒だったクリーシーをラモスの９歳の娘ルピタのボディーガードに推薦する。最初はルピタを冷たくあしらうが、次第に彼女に対し父親のような感情が芽生え、水泳や勉強を教え、家庭教師的な役割も果たすようになる。そんなある日、ピアノ教室へ通っているルピタがクリーシーの目前で誘拐される。誘拐に与する悪徳警官、クリーシーを親身になって助ける新聞記者等で復讐劇の舞台装置が整う。クリーシーは復讐に燃え犯罪組織を追跡し犯罪者を一人ずつ暗殺する。記者からの情報を得つつ誘拐犯のボスに辿り着きボスの弟との人質交換でルピタは生還する。

原作はイタリアで展開する。導入部で紹介されるミラノ・コモ湖・マジョレ湖等は２０１４年夏甥の結婚式に参加した際辿ったイタリア北部の観光地でその山と湖の美しい風景が懐かしく目に浮かぶ。誘拐されたルピタは惨殺されクリーシーは「復讐マシーン」と化して巨大な悪の組織にたった一人で立ち向かう。記者からの情報を得つつ復讐劇が進行する。マフィアの不正と非道に立腹のイタリア庶民は「ゴー・クリーシー」と声援を送る。クィネルファンとして読んだ「Man on Fire」の雰囲気を思いつつ映画とのストーリーの差異もまた興味ある観点であった。

コロナとともに

ＧＯＶＩＤ－19の嵐の中その危険な伝染性に脅威を感じ今後ともこの種のＶＩＲＵＳの完全征服は困難であり「共存あるべし」と社会の意識が向き始めた当節異色を放つ映画情報が目に付いた。

特集　コロナ禍のなかで

少林寺拳法シニア流山健康クラブ

「コンテイジョン」

２００９米国・感染症・pandemicが主題。２０２０今日のＣＯＶＩＤ－19蔓延で世界中が大騒ぎしている現況に酷似した状況を映画化している。感染で呼吸器が損傷すること・接触感染の危険性・感染拡大率・発症しない感染者・感染経路は香港から米国へ等々の２００９年当時の描写は２０２０年現在の状況を正確に予告したかの様な先見性に驚く。漠然とした不安に駆られる人々が長期戦を覚悟し詳細不明ながら少しずつ行動変容を試みるなど今日との共通点も窺え映画が未来に「予告・警告」を発信した傑作と思う。

Outsiderの映画周辺事情

茶道の達人が極めた境地を述懐する名著「日日是好日　「お茶」が教えてくれた15のしあわせ」を映画化した「日日是好日」。茶人・森下典子の原作。プロデューサー吉村は「図書館の本棚でこの本がかぐや姫の様に輝いていた」と述懐した程に感動し映画製作に向かう。大森監督始めスタッフ全員これまで茶道に無経験の人。森下はこの映画製作関係者の「茶道知らず」に驚きこのままでは映画製作は無理だろうと心配し「茶道教室」を開き「茶道のいろは」から教え始める。茶室・庭・植木・板塀・路地・近くに見えるアパートに至るまで街ごと再生したかの様なセットで撮影は進む。茶室の風景は季節と共に変化するが一年を一か月に圧縮して「撮影」するため季節感の表現・茶花・・等々大変な苦労があったとか。例えば11月の茶室に欠かせない茶花が「まんさくの花」。驚いたことにまんさくの花を見たことのあるスタッフが皆無。スタッフが実物を知らぬままスマホ等の情報からまんさくの花の造花に挑戦。その出来栄えに森下が「まんさくだ！」と驚くとまんさく知らずのスタッフが「まんさくに見えますか」と思わず感極まったと言う逸話も紹介されている。二人の若い女生徒が茶室を出て緊張から解放されて縁側で足を伸ばし「意味の分からない事を延々と繰り返す」意味を先生に問う場面で先生は頭で考えるからそう言う疑問が出る。何も考えないで「そこに居ること・繰り返すこと」に意味があると諭す。茶道はhow toものではなく習熟度に応じていろいろな扉を開いていく過程であると言う。また茶道は不安・後悔の様な一般世事で派生する諸々の雑念から「離れる訓練」であるとも言われている。先生の言う「ここに居なさい」とは「余計な事を考えないでお点前の複雑さに没頭しなさい・そこに数々の扉が開くchanceがある」との茶道の極意を示唆したもの。茶道の稽古は生徒にとっては八方塞がりにも思える複雑な所作に縛られる修行だが没頭することで雑事を忘れ心が整い茶室を出た瞬間に全てを忘れ視界が広く開く。茶道は心を整え大人のマナーを教える道筋でもあると。師匠から弟子に伝わる伝統文化「茶道」の意味が腑に落ちた次第。「扁額・掛け軸」は茶道に必須の要素とか。そのエピソードも聞く人の心に響く。武田先生役の樹木希林の推薦で書家ではなく字が書きたくてたまらない一心の幼い11歳の少女の書「日日是好日」を採用。少女はただものでなく事後の談話で「人生で同じ日はない。3様の日の字を意識して書いた」と。掛け軸「聴雨」は「聴雨寒更盡、開門落葉多」に由来。「夜もすがら雨と聴いたのは落葉の音であつた。山居の幽趣。盡き切る處に一切の妙用が許される」とある。徹っしきり、見えないものを観る・尽くしきったところに開ける新しい悟りの境涯をあらわした言葉とのこと。サリバン先生の計らいで指文字でwaterと掌に書き同時に水に触れさせて「水」を肌で感じさせた瞬間にヘレンケラーが発する叫び「water！」。この「ドアが開く」逸話は万人を感動させる場面であり茶道を続けてあらゆる事を積極的に受け止めていれば「誰にでも種々のドアを開くchance・見えないものを知るchance」がある。何時の日かこの映画を観て茶道達人の「日日是好日」・「聴雨」の奥深い境地を味わいたいもの。

「老人と海」をＴＶ映画劇場で観て原作Ernest Hemingway/The Old Man And The Sea解読を目指そうかとも思う。ヘミングウェイが何処まで見えるか・見失って迷路に迷うか・継続の気力が整うか・森下先生の言の様にじっとそこに居て思わぬ扉が開くchanceを捉えるか。

「日日是好日」・「聴雨」を思いつつ一歩一歩。　合掌

×　×　×

イラスト＆エッセイ

もふもふ、もちもち、至福のひと時

中田好美

テレビでもネットでも、動物の癒し系動画を見掛けると、ついつい夢中になって観てしまう。可愛かったり、天然だったり、勇ましかったり。さまざまな動物のなかでも、最近では猫が可愛くてたまらない。

7年前にシネマ気球で17年ともに過ごした愛犬への想いを綴り、このような出逢いは二度とないだろうと思っていた。しかし、想いを綴ったその年の9月に運命的な出逢いが訪れた。

普段ならまっすぐ帰る予定のその日に限って、買い物をしようとスーパーへ立ち寄ることになった。母が駐車スペースを探していると、突然声を上げた。

「なにか落ちてる！　今すぐ降りて確認してきて！」

私からはなにも見えず、車を降りて確認するまで、なんともいえない恐怖を感じていた。慌てて駆けつけると、そこにいたのは生まれて間もない子猫であり、片手に収まるほどの小さな命であった。まだ目も開いておらず、9月の残暑厳しいなか、体温調整もままならない子猫にとって、たいへん過酷なものであっただろう。その子を保護しながら周りを見渡したとき、駐車中の車内にいる男性とふと目が合った。こちらを見ているようで見ていないような、独特の雰囲気を感じた。微動だにしない男性に違和感を感じながらも、すぐさま車内へ戻り、愛犬がお世話になった動物病院へと向かった。

（今思い返せば、その男性は子猫を捨てた当人であり、子猫の行く末を目前で見ていたのではと邪推してしまった）。野良猫を保護した場合、ノミや感染症などに罹っている恐れがあったが、保護した子猫はとても綺麗で、ノミにも寄生されず健康状態は良好であった。ほっとしながらお会計を待っていると、とても慌てた様子の女性が入ってきた。ハンカチに包まれたなにかを大事そうに抱えていて、話を聞いてみると、同じスーパーで子猫を保護したとのことであった。とても痛ましいことにその子猫は車に轢かれてしまい、一刻も早く苦しみから解放してあげたいと、安楽死をお願いしに病院へ駆けつけたのだそうだ。その女性は捨てられた子猫を何度も見てきたそうで、悲しみと憤りに満ちた表情が忘れられない。苦しんでいる命を目前に、私は手を差し伸べられるだろうかと、慈悲深いその女性の想いに心を打たれた。その女性が待っている間、私たちが保護した子猫を見て

「この子は助かったのですね、よかった……写真を撮ってもいいですか？」

と優しい眼差しで子猫を見つめていた。もっと周りを注意深く見ていたら、一緒に助けられたかもしれないという悔しさで、胸がいっぱいになった。

「優しい飼い主さんが見つかってよかったね……」

と声を掛けてもらえたことが、なによりもの救いであった。9月の秋に保護したことから「もみじ」と名付け、「もっちゃん」とみんなで呼んでいる。

生まれたばかりの子猫を育てるのは初めてのことで、ミルクやトイレ、体温調整など、母と交代しながら付きっ切りで育てることになった。トイレの仕方を一回で覚えたのにはびっくりしたが、掘ったところと真逆に用を足すのは、今も続く変わった癖である。子猫の成長はあっという間で、離乳食を食べる頃には、覚束ない足元で部屋中をぴょこぴょこと走り回っていた。その愛らしい姿は動画に収めてあるが、見るたびについつい口元がほころぶ。

「ただそばにいてくれるだけでいい」という言葉を聞いたりするが、なかなか実際そう思えることは少ない。そばにいれば期待してしまうし、なにかを求めてしまうもの。そういう意味で、もみじに対しては、ただそばにいてくれるだけで本当に癒される。嫌なことがあっても、ふわふわのお腹の毛に顔を埋めると一瞬で心が静まっ

てゆく。みんなに猫吸い（猫の体に顔をうずめる行為）されているときの、達観した表情もまた可愛い。へそ天（おへそを天に向けて寝転んでいる姿）や、丸い足先、ぷくっとした口元など、その柔らかなフォルムのひとつひとつに魅了される。

もみじは今まで暮らしてきた猫とは少し違っていて、いろいろな個性にあふれている。母が寝起きにトイレへ行った際、足元がふらついてしまい、私が後ろから支えたことがあった。その様子を間近で見ていたもみじは、心配そうに尻尾を下げながら後を付いてきて、母がトイレから出てくるまでじっとドアの前で待っていた。それからというもの、母がトイレや手洗いに行くたびに、走って見守りに行くようになった。ごはんを食べていても、遊んでいても、最優先事項として見守りを行うのだ。普段は滅多に鳴かないのに、トイレが長くてなかなか出てこないときは、心配そうにドアに向かって鳴くのである。帰りはS時を描くように足元に擦り寄りながら、母の部屋まで見届ける。人の起こし方も見事なもので、朝お腹が空くと2階の部屋までドアを開けにきて、ベッドの脇からじっとこちらを見てくる。なかなか起きないでいると、大切にしている物がある場所へとじりじり近寄っていく（起きないと登っちゃうよ～とでも言わんばかりに）。登って欲しくない場所を理解しながら、あえてそこを狙い撃ちする賢さに驚くばかりである。極め付けはおねだりの仕方。夕食に好物のお肉やお魚があると、調理段階から猛烈なおねだりをしてくる。もちもちのお腹を左右に揺らしながら駆け寄ってきて、突進気味に頭を擦り付け、そのままの勢いで器用にでんぐり返し。その時にお尻の米印を見せつける（あなたを信頼していますの気持ち）のが、彼女のアピールポイントとなっている。その後は前足を丸くして、背中をくねらせながら可愛さを前面に出してくる。しばらく放っておくと、目を細めながら寝たふり作戦。たまに見ると薄目を開けて、こちらの出方を伺っているのがたまらない。猫ってこんなにも戦略的に行動できるものなのだと、もみじと暮らして初めて知った。毎晩行われるおねだりと、健康のために制限する人間との駆け引きが、今日も続いている。最近ではテレビや映画も観るようになり、特にお気に入りなのが『猫も杓子も』という、作家と猫の日常を映したネコメンタリー番組である。冒頭で猫の鳴き声が流れるのだが、その声が聞こえた途端、2階に居ようともすぐさま1階のテレビ前へと走っていく。元気に動き回る猫たちに向かって、画面越しにねこパンチを繰り出しながら目をまん丸にしている。

もみじとそんな日々を過ごすうちに、猫がたまらなく可愛くなり、猫が出演している映画をいろいろと観てみることにした。猫と長い間生活していると、表情や仕草などで、感情をある程度汲み取ることができる。だからこそ猫の映画は難しく、嫌がっているのに無理やり撮影しているのが分かると、一瞬で冷めてしまう。猫に人間が声を当てているのもあまり好きではないし、自然な猫の姿を楽しめる映画はないものかと、あれこれ探していた。ようやく見つけたのが、今回ご紹介する『こねこ』という映画だ。大抵の猫作品は、人間がメインとなって物語が展開していくが、この作品は猫と人間の描写バランスが絶妙で、どちらかに偏ることなく最後まで楽しめる作品であった。

ペット市場で姉弟に一目惚れされ、優しい一家に迎えられた子猫のチグラーシャ（トラ猫の意）。あたたかく幸せな日々を送っていたが、ある日小窓から外に停車中のトラックの上に落ちてしまい、知らない町へと運ばれてしまう。迷子のチグラーシャと、そこで出会う人々や猫たちとの大冒険を描いた物語である。

チグラーシャに夢中になりすぎて、勉強や睡眠がおろそかになるマーニャ（マーシャ・ポポワ）とサーニャ（サーシャ・ポポフ）姉弟に自身を重ね、もみじを迎えた日のことを思い出し、懐かしい気持ちになった。可愛いだけでなく、やんちゃ盛りで大変な日常も描かれている。食器が壊されたり、お父さん（アレクセイ・ヴォイチューク）の大事な楽器のケースに粗相をしたり、カーテンによじ登ったり。されたら大変なことも、ユーモアと優しさを交えて表現されているので、ほのぼのとした気持ちになる。迷子のチグラーシャが出会う、個性溢れる猫たちの演技も素晴らしく、鬼気迫るアクションシーンにはドキドキした。チグラーシャが大きなドーベルマンに襲われそうになり、間一髪のとこ

ろでワーシャという貫禄のある猫が助けに入る。その勇ましい姿と、きりっとした表情に惚れ惚れとした。その後「親分！」と言わんばかりに、ワーシャの後ろをついて歩くシーンが可愛くてたまらない。そのときの尻尾が、ピーンと真っ直ぐ上を向いているのもいい。ロシアの寒空のなか、野良猫たちの厳しい環境が描かれるが、寒さに震える猫たちを、毛布やコートで優しく包むシーンが随所にみられる。このふんわりと感じる優しい温もりが、なんとも心地よい。

姉弟たちとともに並行して描かれるのが、たくさんの猫と暮らすフェージン（アンドレイ・クズネツォフ）の物語。雪道に砂を撒く仕事の最中も、猫が後ろをついて歩く。フェージンと行動を共にする、バケツの中の猫や肩乗り猫の愛らしさといったら。仕事を終えて帰宅すると、フェージンのそばに自然と猫が集まってくる。座った椅子の周りに寄り添う猫たちを、もふもふと優しく撫でているシーンもたまらなかった。

猫に演技をさせるのは大変難しいと言われているが、この作品では世界屈指の猫調教師である、アンドレイ・クズネツォフがフェージン役で出演している。フェージンと猫とのあらゆるシーンが、優しさと愛らしさにあふれていて、見ていてとても癒される。猫と心を通わせるアンドレイと、猫を愛するイワン・ポポフ監督だからこそ、収められたシーンで盛りだくさんであった。全編通して猫の自然な姿を楽しめるため、猫好きな人が観ても、とても感情移入しやすいのではと思った。猫の低い目線で映されるカメラアングルも素晴らしく、2年という長い時間を掛けて撮られた、こだわりのシーンの数々をぜひ観ていただきたい。少ない予算で製作されたという本作は、家族総出で作品に携わっている。イワン監督の子供たちは姉弟役として出演し、モスフィルムの技術スタッフである両親は、製作側で参加している。家族みんなで作られた作品というのも、とても微笑ましいなと思うのであった。猫を愛する人たちの、愛あるシーンの数々に、ほっと心安らぐあたたかい作品であった。

今回書いた『こねこ』も、もみじは一緒になって観ていた。1時間以上も画面を見続けるものだろうかと、ものすごい集中力に驚いてしまった。猫が出てくるたびに目を丸くして、じりじりと画面に近寄る姿に癒されながら、思わぬ映画仲間ができてしまった。ちなみにアクション映画は音の迫力もあり、あまり好きではないようだが、フルCG作品の『ライオン・キング』を観ているときは、サバンナを行き交う生き物たちに大興奮して、両足高速猫パンチをしていた。

日常のさまざまなことで心の形は変わってしまう。そんな心をまるくしてくれるのが、愛猫もみじの特技である。尖った心も、湿った心も、もふもふ、もちもち、至福のひと時まるくなる。

ラグビーってとても面白い……のだ

久保嘉之

序

西暦二〇一九年すなわち令和元年九月、日本で初めてラグビーのワールドカップが開催された。アジアでも初である。何とも喜ばしいことだ。当初私は、観客は集まるのだろうかと心配だったのだが、蓋を開けてみると全くの杞憂、まるでお祭り騒ぎである。俄も含めてだろうが、日本にもこんなにラグビーファンがいたんだと、改めて驚いた。

かくいう私はスポーツ観戦がさほど好きではなくて、野球もサッカーもまず観ないのだが、フィギアスケートとラグビーだけは、なぜかよく観ている。食い入るように観ていることもあるし、ことラグビーに関しては、握りしめた拳に気付いて「何を熱くなってるんだ」と、苦笑することもままある。理由が自分でもよく判らない。

ある時息子に、

「ラグビーってすごく面白いんだが、なんでかな？」尋ねたことがある。息子は、

「肉弾戦だからじゃない」そう答えた。成程。確かにタックルが見事に決まった瞬間や、スクラムやモールで押し込みトライを決めた時など、思わず身を乗り出している自分がいる。他のスポーツでは味わえない醍醐味である。だが好きな理由はそれだけだろうか？

よく云われることだが、ラグビーでは試合終了を「ノーサイド」という。プレーに気合が入り過ぎて、掴み合いになったり引き摺り合いになったりしても、試合が終わった瞬間、敵味方の区別はなくなり互いに健闘を讃え合う。他のスポーツにはない慣習である。「紳士が戦う荒くれ者のスポーツ」といわれる所以だろう。終わったら憾みを残さない、その潔さに惹かれているのかも知れない。

壱

ここでラグビーを題材にした作品を、二本ほど紹介したいと思う。ラグビーが好きな方にはより興味を深められるような、あまり関心のない方には一度観戦してみたいなと思わせるような、そんな作品である――

一本目は、クリント・イーストウッド監督による映画『インビクタス（負けざる者たち）』。ジョン・カーリンの原作をもとに、アンソニー・ペッカムが脚本を起こしたものだ。二〇〇九年の製作である。

私が初めてアパルトヘイトにより、抑圧され虐げられ続けた南アフリカ共和国における黒人の悲哀や憤りに接したのは、『コーラスライン』の監督であるリチャード・アッテンボローが撮った『遠い夜明け』によってであった。アパルトヘイトとは、南アフリカの全人口の約二割を占める白人が残り八割の非白人を、人種に基づいて居住区を定め、参政権を認めず、異人種間の結婚を禁じるなどの措置で、徹底的に差別した人種隔離政策のことである。国際的な非難や経済制裁、国内での反対運動の激化により、この悪名高き制度が撤廃される一年前の一九九〇年の二月、国家反逆罪の罪に問われ実に二十七年の長きをロベン島の刑務所に収監されていた、ネルソン・マンデラＡＮＣ名誉議長（モーガン・フリーマン）が釈放される。彼が釈放手続きのため搬送される途次、道路の片側では貧しい黒人の少年たちがサッカーに、反対側では裕福な白人アフリカーナの少年たちがラグビーに興じている姿が映し出される。鮮やかな対比である。

アパルトヘイトが撤廃されてからも、ＡＮＣと対立する政党との抗争は激化し、内戦を勃発しかねない危機を孕んでいた。加えて深刻な不況による失業や犯罪の増加、白人と黒人の軋轢、黒人間の勢力争い、山積する経済問題――政情は極めて不安定であった。そんな中、一九九四年南アフリカ初の全人種参加の総選挙がおこなわれ、マンデラは大統領に就任する。

……この辺り、尺の都合だと思うが、時間の経過が描かれないため、マンデラが釈放されてすぐ大統領に就任するという印象を受けてしまうのが、難といえば難か。だがモーガン・フリーマンの演技は堂に入ったものだ。風格といい、抑制の利いた理知的な話し方といい、流石である。実際のネルソン・マ

ンデラと雰囲気というか、趣も似ているようだ。――実はこのフリーマンのキャスティングには興味深い挿話があって、マンデラが自伝『自由への長い道』を出版した際、「映画化されるとしたら誰に演じてもらいたいか」という記者の質問に、フリーマンの名を挙げたというのである。その話を聞いたフリーマンはヨハネスブルグのマンデラの自宅を訪い、映画化権を取得。次にペッカムに書かせた脚本を、イーストウッドに送ると同時に監督を依頼し、後日快諾を得たという。

マンデラがまず目指したのは、〈民族友和〉であった。その為には、まず自分たちを迫害し続けた白人を、赦すことから始めなければならない。マンデラは護衛官の主任であるジェイソン・シャバララ（トニー・ギコロギ）にいう。彼も黒人である。

「赦しは魂を自由にする。怖れをも取り除く。人を赦すことは最強の武器なのだ」と。

マンデラには、まだまだ南アフリカ共和国の政府や軍を動かし、経済を牛耳っている一握りの白人たちの支持を得なければ、先へ進めないことがよく判っていたのである。

同時に彼は、祖国が世界に誇れるものを求めていることも、痛感していた。

その為には、何を成せばいい。――ラグビーだ。この国のラグビーチームを、世界一にすることだ。折よく自国でワールドカップが開催されるまで、あと一年猶予がある。

当時、南アフリカのスプリング・ボックスは、敗戦に次ぐ敗戦で、ラグビー協会の会長をして「この国の面汚しだ」と言わしめるほどに、弱体化していた。そこで国家スポーツ協議会は刷新をはかるため、チーム名を国花であるプロペアスに変更し、アパルトヘイトの象徴といわれたグリーンとゴールドのユニフォームの色も変更しようとする。

だがマンデラは、強硬に反対する。まさに採決がおこなわれようとする協議会場へ出向き、

「スプリング・ボックスは白人アフリカーナの宝であり、取り上げれば彼らの支持を失ってしまう」思いやりと自制心を持った寛大な心で、どうか残してほしいと頼み込む。何とか聞き入れられたものの、だがこれはひとつ間違えば大統領としての政治的権威を失墜させてしまいかねない、危険な賭けであった。だが彼には揺るぎない信念があった。

「黒人と白人の緊張を解かねば、国が崩壊する」

フランソワ・ピナール主将（マット・デイモン）がスプリング・ボックス残留の新聞記事を読んだマンデラは、彼を官邸に招待する。

「どうやったらチームのメンバーに、やる気を出させることが出来るか？」

マンデラの問いにピナールは答える。「手本を見せます。手本になるよう心がけます」

マンデラは首肯しつつも、「閃きが大事なのではなかろうか。そのためには他人の為した偉業に触れることだ」続けて、九二年バルセロナ・オリンピックに招待された時、スタジアムの全員が「神よアフリカに祝福を」を歌って歓迎してくれた話をした。それによって大いに勇気づけられたことも。マンデラは生まれ変わった南アフリカ共和国を、「虹の国」と表現した。国民から持てる以上の力を引き出さねば、「虹の国」の発展はあり得ない。その為に成さねばならぬことは。

ワールドカップで優勝してくれ！　マンデラの思いを、ピナールは圧倒されながらも、確かに受け取った。そんな彼に、新しい指令が舞い込む。国中の黒人地区で、子供たちのためのラグビー教室を開いて欲しいと……

今まで試合のたび毎、白人は自国チームを応援し、黒人は必ず相手チームを応援してきた。マンデラはその風潮を無くしたかったのだろう。ラグビーを教える広場の隅に看板が立ててあり、そこには「ワンチーム　ワンカントリー」と書かれていた。

一九九五年ワールドカップ開催。スプリング・ボックスは快進撃を続けていた。そしていよいよニュージーランド代表オールブラックスとの、優勝決定戦を迎える。その前日チームは、慰労とここまで導いてくれたマンデラ大統領への敬意を籠めて、ロベン島の今は収監されてる人もいない刑務所を見学する。ピナールはマンデラが閉じ込められていた独房にひとり佇み、

「三十年近くもこの狭い独房に入れられて、それでも人を赦せるのはどうして？」自問する。大統領の思いとは何？

チケットは白人を中心に完売する。高価で、余程のツテでもない限り黒人には手が出なかったのである。六万三千の観衆。

試合前に行われる、オールブラックスのマオリ族に伝わる戦いの踊り、「ハカ」。その威圧、その挑発に、スプリング・ボックスは怯むことも、乗せられることもなかった。――イーストウッド監督は、いつも思うのだが、決して凝った撮り方をしない人である。偶に物足りなく感じることはあるものの、正攻法でぐいぐい押していく、それが対象に迫る一番の近道だ、といわんばかりの演出が、今作ではすごく効果を上げている。観応え充分。ただもう少し試合を観たかったな。試合は一進一退の攻防を繰り広げ、九対九の同点で延長戦にもつれ込む。残り二十分。ここから試合終了まで、緩やかなスローモーションで撮影される。相打つ肉弾。どの顔も必死だ。カメラも近い。引き込まれるような臨場感である。まずオールブラックスの、ペナルティキックで三点。これはすぐに取り返す。そして奇跡ともいえるスプリング・ボックスの、ドロップキック。六万三千人が総立ちである。湧き上がる大歓声――

試合後レポーターの「優勝できたのは、球場にいる観客のお蔭ですね」問いかけに、ピナールは「それと四千三百万の国民みんなのお蔭です」

ラグビーを通じて、黒人白人を問わず他に誇れるものを持てた欣喜、例えこの瞬間だけであったとしても、共に優勝を祝っての雀躍ぶり。マンデラ大統領の狙いはあやまたず、民族融和の、「虹の国」建国の、大きな一歩を踏み出したのである。

トロフィー授与の際、マンデラ大統領は、

「祖国に誇りをもたらしてくれて、ありがとう」。ピナールは答えて

「こちらこそ誇れる祖国にして下さって、感謝します」――この言葉がずんと胸に沁み渡るほど、この映画の出来栄えは素晴らしい。

弐

『インビクタス』を観て以来、私はつい最近まで南アフリカチームを応援していた。私もかなりのミーハーであるらしい。だが、言い訳めいて恐縮だが、確かにこの当時の日本チームは弱かった。映画の中でも述べられているが、この年のワールドカップで、日本はオールブラックスに、何と百四十五対十七という大差で敗れているのである。応援するに値しないとは思わないが、映画の感動そのままを引き摺って、南アフリカに声援を送り続けた私を赦してほしい。それにしても昨年の日本チームの活躍には、目を瞠った。「ブレイブ・ブロッサムズ」堂々のベスト八入りである。どうやら自国でワールドカップが開催されると、思いもよらぬ気合に充たされるようである。今更ながら、応援する楽しみが出来た。この調子でレベルアップをお願いしたい。

さて次に紹介したいのは、映画ではなくTVドラマの『ノーサイド・ゲーム』である。

二〇一九年七月七日から九月十五日まで全十回にわたり放映された。

――トキワ自動車経営戦略室に在籍する君嶋（大泉洋）は、上司である脇坂（石川禅）と共に、一千億で風間商事を買収しようと画策する滝川常務に真っ向から反対し、府中工場へ左遷される。付いた肩書きの総務部長は、同時にラグビーチーム〈アストロズ〉のGM（ジェネラル・マネージャー）を兼務することでもあった。実はこの〈アストロズ〉、年間十四億という予算を費やしながら、毎年プラチナリーグの最下位辺りで喘ぎ、チケット収入もほぼ無いに等しく、「トキワのお荷物」と蔑まれる程度の存在でしかなかったのである。得べくんば、廃部に追い込みたい。しかし島本社長（西郷輝彦）の肝煎りもあり、迂闊に手を出しかねたのだが、そこでラグビーに何の関心もなく、且つ上司に臆面もなく意見を具申し、経営戦略室勤務の経験から利益という基準で判断するであろう君嶋に、白羽の矢が立ったのである。それも成就の暁には本社復帰もあり得るかも、という餌をぶら下げて……だが果たしてそこまでの御膳立てを整えたのは、滝川常務の仕業だったのであろうか？　風間商事の買収案は価格が八十億にダンピングされて、再び浮上する。滝川常務は、なぜ風間商事に拘り続けるのか。物語の後半で白水商船のタンカー座礁事故の原因が、実は使用した風間商事のバンカーオイルが原因ではないか、という疑惑が発覚し、買収問題は二転三転する。その裏側では熾烈な派閥争い、欲に目が眩

んだ出世競争が、黒い渦を巻いていたのである。この辺り、原作者池井戸潤の代表作『半沢直樹』を彷彿させる展開である。

一方、〈アストロズ〉のメンバーは懸命だった。大好きなラグビーをやらして貰いながら、勝つことが出来ない。それが負い目となって、押し付け仕事もサービス残業も断れない。当然練習には遅れがちとなる。特に佐々（林家たま平）は、人の好さが災いしてそれが顕著だった。君嶋には理解できなかった。そこまでして打ち込む理由は、いったい何だ？

メンバーの、ラグビーに対して一途に向き合う気持には共感できた。熱意もわかる。しかし君嶋の出した結論は、やはり廃部だった。現状で利益を出すことは困難。意見書を提出する。も、本社へ戻れる夢はあえなく潰えてしまう。「そんな約束をした覚えはない」失意の奈落へ突き落とされたのである。

雨が降っていた。夜のグランドである。その隅で君嶋は〈アストロズ〉の練習を、濡れそぼりながら眺めていた。「俺はいったい何をやってるんだ。（出世を願って汲々としている俺より）彼らの方がよほど純粋ではないか」――「タックルも満足にできないGMさん。練習の邪魔だから、どっか行って貰えませんか」チームの要である浜畑（廣瀬俊朗）の挑発に、

「どこへ行けっていうんだ。どこにも行くとこなんかありゃしないんだよ」君嶋はとり憑かれたごとく何度も何度もタックルを繰り返した。泥塗れになって。倒れ込んだ君嶋の胸の上に、浜畑はタオルを置く。仲間の証として。

この日を境に、君嶋は生まれ変わった。〈アストロズ〉のメンバーと共に戦おうと決めたのである。俺にやれることをやる。

まず意見書を、もう一年様子を見るべきだという内容のものと差し替え、島本社長の口添えで何とか認可を得ると、次は新監督捜しに奔走する。城南大学を三年連続の優勝に導きながらも、〈サイクロンズ〉の監督であり大学ラグビーに大きな力を持つ津田（渡辺裕之）の意向に背いたとして解雇された柴門（大谷亮平）に、君嶋は眼をつける。実はこの柴門、君嶋とは大学の同期生で、君嶋が秘かに思いを寄せていた彼女を彼に奪われてしまったという、個人的な因縁があった。だが今はそんなことに拘っている時ではない、勝つためには彼が必要だ。君嶋はオファーを開始する。

「もっとラグビーを知って貰おう」チケットの収益を上げるためにも、まず地元の人たちの応援を得なければならない。そのために君嶋はホームページを立ち上げてファンクラブを設立し、子供向けのラグビー教室を開き（これには君嶋の息子も参加）、ボランティアとして病院の慰問や商店街の清掃活動などを、並行して行い始める。練習時間を削られるわけだから、当然メンバーから苦情が出る。精神的・肉体的負担も大きい。だが君嶋は揺れ動きながらも、断念はしなかった。必要なことだという、信念があったのである。

監督が決まった後は、日本蹴球協会（日本ラグビーフットボール協会がモデル）の、体質改善に取り組まねばならない。プラチナリーグへの参加費として千五百万を徴収しながら、名目上は試合の運営や宣伝、チケットの販売管理を行っていることになっているが、販売収入の戻りはほぼゼロ。集客率を高め、チケットの販売枚数を増やすためにはどうすればいいか。苦しい台所事情は〈アストロズ〉だけにとどまらない。他のチームも同様である。打破するためにはまず会長富永（橋幸夫）の絶対的権威の元、ラグビーは営利を目的としたプロスポーツではなくアマチュアの競技だ、一点張りに言い募る体質を改革しなければならない。どうやって。君嶋は要望書・提案書・改革案を、専務理事の木戸（尾藤イサオ）に、何度も何度も出し続ける――

弱小チームを優勝に導くという話はよくあるが、この辺りのエピソードを観ていると、どうも池井戸潤は『インビクタス（負けざる者たち）』を観て、『ノーサイド・ゲーム』の着想を得たのではないかと思える。マンデラ大統領が国家スポーツ協議会へ出向き、チーム名とユニフォームカラーの存続を求めた件や、子供たちへのラグビー教室の開催など、展開がよく似ているのである。とまれ傑作の影響を受けて、傑作が生まれる。嬉しい限りである。

この年〈アストロズ〉は優勝決定戦で、宿敵〈サイクロンズ〉に惜敗する。優勝できなければ、二位も最下位も同じこと。チケット収入も思ったほど上がらず、チームの命運は風前のともし火。役員会で潰されてしまう。君嶋の必死の

説得も空しくなりかけたが、「来年優勝できなければ、私が引退する」島本社長の馘首を賭けた発言で、もう一年の延命と予算を獲得する。

さてここまでの梗概が前半部であるが、後半部は提起された問題の答、紆余曲折を経て導き出される、各々の結果である。〈アストロズ〉は悲願の優勝がなったのか、チームの存続はかなうのか。日本蹴球協会の体質改善は出来たのか、球場を埋め尽くすほどの観客動員は果たせたのか。滝川は、脇坂は、そして君嶋はどうなったのか？吉と出たのか凶と出たのか。くだくだと書き記すよりは――本当は七尾（眞栄田郷敦……ゴードンと読みます。千葉真一の次男です）のチーム参入で勢いを盛り返すエピソードや、浜畑や里村（佳久創）の引き抜きの話など書きたいことはあるのだが――潔くここで筆を置きます。できればDVDで、是非ご覧になってみてください。

云えるのは、パスやキックの名称やルール・戦術などの用語を、判り易くドラマの中で解説してくれるので、ラグビーに詳しくない方でも気楽に観れるということ。もうひとつ、浜畑役の元ラガーマンである廣瀬俊朗の演技、ぶっきらぼうで決して上手くはないのだが、説得力と存在感は断トツです。連続ドラマの特性を活かして、試合シーンも多いし、観ていてわくわくできますよ。米津玄師のテーマ曲『馬と鹿』も、思い切りドラマを盛り上げていて、必聴です。

いやー映画って、もとといラグビーって本当に面白いですネ。

点鬼簿

カーク・ダグラスの顎

TVニュースでカーク・ダグラスの訃報に接した時、甚だ不謹慎ながらまだ存命だったんだ、と正直驚いた。二〇二〇年二月五日没、享年百三歳。大往生といえるのではなかろうか。

昭和二十六年生まれの私が、物心付いた頃には、すでに大スターだった人である。息子のマイケル・ダグラスが弔辞の中で、「映画の黄金期に絶頂期を迎えた」と言う様な事を述べていたが、長い人生様々な出来事があったに違いないとは思うものの、華やかなりし時代に映画人生を送れて、或る意味しあわせな人だったのかもしれない。

日本の年号でいうと大正の生まれになるから、私の父親より年上ということになるし、世代的にギャップがあるせいもあって、作品の大半は観ていない。ただ『OK牧場の決斗』と『スパルタカス』は、記憶に残っている。前者が一九五七年、後者にしても六〇年の作品だから私は九歳、当然封切時には観ていないと思う。いつ観たのかは覚えてないが、『OK牧場の決斗』で演じた歯科医でありながら酒と博奕に身を持ち崩し、挙句には胸まで病みながら、主役のワイアット・アープ（バート・ランカスター）との奇妙な友情で彼を助けるドク・ホリディーの役は、優柔不断とも思えるほど取り澄ましたワープよりはるかに好感が持てて、印象深かったようだ。『スパルタカス』については残念ながら切れ切れの記憶しかないが、調べてみたら制作総指揮をカーク・ダグラス自身が執っており、監督にはかのスタンリー・キューブリックが当っているではないか。敵役の貴族クラサスにはローレンス・オリビエ。ローマの剣闘士を主人公にしたハシリともいえる作品で、今思うと、とんでもなく贅沢な映画なんですよね。

カーク・ダグラスの最大の特徴は、その顔立ちにあると思う。ぎょろっとした目玉と顎の真ん中にある笑窪。それが角度によって、顎が割れているように見えるのである。一目見たら忘れられない、そんな顔である。スターの条件であろう。

唐突だが、私がまだ小学生の頃、貸本屋さんというのがあった。小説や漫画を貸してくれるのである。全盛期は「少年サンデー」や「少年マガジン」などの漫画週刊誌が登場してくる前迄ではなかったろうか。借り賃が幾らで期間がどれくらいだったのか全く覚えていないのだが、借りた本は意外と覚えている。白土三平の『忍者武芸帳（影丸伝）』もその頃読んだ作品である。とりわけよく借りたのが毎月発行される貸本屋向けの分厚い本で、確か『刑事』というタイトルだったと思う。何人かの作家の短編を纏めたものである。巻頭カラーはほぼさいとうたかをの作品で、難波健二やありかわ栄一、後にさいとうプロに入った石川フミヤスあたりが常連で、たまにつげ義春・永島慎二・影丸譲也などが執筆していたようだ。失礼何を云いたいかというと、さいとうたかをが描くキャラクターに、顎が割れている人物が結構おり、例えば人気が出てシリーズ化された〈台風五郎〉や、後に「少年マガジン」に連載された〈無用之介〉などがそうで、そういう顔立ちは日本人にはなかなかないものだから、私はカーク・ダグラスをモデルに、或いは参考にしたのではないかと、当時も今も思っている。おそらく本国でも珍しいのではなかろうか。ついでに書いておくと「ボーイズライフ」で四作品が連載された007シリーズのジェームズ・ボンドも、顎に笑窪がある。そういえば難波健二の作品にも、割と多かったな。

――『ロッキー』に次いで、シルベスター・スタローンの当たり役となった『ランボー』シリーズだが、最初はカーク・ダグラスにオファーがあったという話を、聞いたことがある。なぜ断ったのかは判らないが、観てみたかった気はする。

ご冥福をお祈りする。（錬平）

黄泉路へと急ぐ者達への挽歌らしき一文
或いは誄歌（るいか）らしき一文

鈴木輝夫

トッポ・ジージョが死んだ。そうである。あの有名なお馴染みのキャラクター、例のトッポ・ジージョである。初めから死者の話で恐縮千万であるが、今回は死者の話が終りまで続く事になりそうである。悪しからず。南無三宝――。

トッポ・ジージョの職業は〔映画評論家〕であった。彼の事は後半に書く。更に言えば、彼の廻りに蝟集していた人物も、出来るだけ記してみたい欲望に駆られている。

志村けんが新型コロナウィルスで死亡した。私は彼の大ファンであった。享年七十。志村けんは己の望んだ人生を、見事なまでに生き切ったのである。お笑いの天才として。

志村は高校時代から、お笑いの道を我が往く可き道と心に決め、当時、最も憧憬の的であった『ドリフターズ』のリーダーいかりや長介の付き人に何とか潜り込んだ。俗に言う〔坊（ぼう）や〕である。因みに、ドリフターズとは、漂流者達或いは流れ者達の意である。

今では信じられないであろうが、初めは歴とした正統的な音楽バンドであった。後の彼らを考えればにわかに信じられないであろうが、当時の日本中の若者達を熱狂の渦に巻き込み、大人達からは、その肝胆を寒からしめて「不良どもの音楽」と恐れられた例の『ビートルズ』、何と何と、その日本での初公演の前座を務めているのだ。尤も、そのころのメンバーには我らの志村けんはおらず、荒井注が入っていたのであるが……。年嵩の荒井注が自身の健康問題で辞め、その後釜に志村けんがいよいよ抜擢されたのである。

恐らく志村自身は大いに喜び且つ又大変に驚いたであろうが、私にはそれよりも彼は人には言えない、絶大なる不安と索漠たる劣等感に苛まれていたと想像している。

第一にはいかりやの坊やであった事、第二には楽器を演奏する事が全く出来ない事。だが志村けんが抜擢された当時のドリフは、幸運にも『8時だョ！　全員集合』（TBS系毎週土曜日夜八時放送）で、全国の大人からちびっ子まで大人気の〔コント集団〕に完全に様変りしており、楽器などを演奏出来なくとも何ら問題はなかったのである。

驚く事にこの番組の最高視聴率は、何と五十・五％を記録しているのだ。この番組が始まったのは昭和四十五年からである。途中に半年間程の休みはあるのだが、昭和六十年まで都合八百三回の長きに渡って続いたのであり、更に驚くのは総て当日の生での放送であり、更に更にはテレビ局のスタジオではなく、東京を初めとする近隣県都市の公会堂・市民ホールなどに、観客達（多くは子供達とその保護者達）を入れて、土曜日夜八時ジャストにいかりや長介の掛け声も賑々しくスタートするのである。生放送の為、時として不慮の出来事が勃発する事が儘ある。ドリフのコントが終ってバンドの演奏が始まっているのに、次の出番のアイドル歌手の出が遅れる。（彼ら彼女らもコントの一部に出ていて着替えに手間取った為）〔屋台崩し〕（舞台上に作られた建物が、崩壊するのを実際に見せる大きな見せ場）が余り上手く行かず、中途半端の儘で肝心要の最後のオチが決まらないなどが見られた。

恐らく、次に書く事が番組史上最大のアクシデントであろう。これは今でもテレビ業界で語り草になっているらしい。ある回の放送直前、一大事が勃発したのだ。寧ろ珍事と称した方が宜しかろう。それも一大珍事である。何と何と、生放送しなければならない会場の電源が総て切れ、会場は非常口を示す例のランプだけが頼りなさ気に灯り、舞台も客席も唯々真っ暗闇――。長さん以下のドリフの面々、更には現場のスタッフ達は、この途方もない破天荒の異常事態に如何に対処したのか？　答は到って単純。そのまま予定通り、長

さんの「さあっー始め様っ」との何時もの掛け声で、何もなかった様に始めたのである。確かにこれは埼玉県のある市での出来事であったと思う。

で、リーダーのいかりや以下のドリフの面々は具体的にどうしたかと言えば、五人各自可成り大きな懐中電灯を持ち、自分の顔を照らしたりメンバー各々の顔を照らしたり、時には会場に詰め掛けているちびっ子達にも、その頼りなさ気な弱い光を当てたのである。会場に充満する大声援。よもやよもやの大熱狂と大興奮――。何時も以上の大盛り上りである。これらが生中継でその儘テレビに映し出されたのだ。会場の電源は何らかの事故で総てダウンしたのであるが、物怪の幸い、テレビ中継用の回線の電源は生きており、TBS本局との繋がりには何らの異常もなかったのだ。(テレビ中継車には、強力な電源車が付随するのが常である)

偶然と言う可きか幸いと言う可きか、私はこれら一部始終を家のテレビで見ていた。言っては悪いが、私はこの驚愕のアクシデントを、底意地の悪さでニタニタと笑いながら楽しんだのである。話が『8時だョ――』に集中して仕舞った。志村けんの死に戻す。私には、彼が大抜擢されて正式メンバーになった当初、当り前ではあるが、志村は他の四人のメンバーに対して可成り遠慮していた気配が濃厚に感じられた。それはそうであろう。彼はリーダーの坊やだったのだから。

彼がドリフに加わった当初、お笑いの中心は加藤茶が主に担っていて、長さんの意地の悪い突っ込みに、ここぞと許り絶妙にボケるのがコントの中心で、ちびっ子達には加藤はスーパースターで一番の人気者であった。その加藤とコントなどで相対する時、志村が如何にしても引いて仕舞うのも無理もない。が、志村の奇態な言動が直ぐにちびっ子ファンに大人気となり、忽ち加藤茶を凌ぐメンバー一のお笑いの寵児となるのは意外と早かった。詰り、メンバーの中でいの一番に笑いの取れる男になっていたのである。

そして昭和五十一年、志村が苦し紛れ(理由は長くなるので省略する)にたまたま歌った『東村山音頭』が大受けし、更なるスーパースターへと駆け上がった。昭和六十年、十六年続いた超人気番組『8時だョ！　全員集合』は終了した。その頃は笑いのトレンドが変わり、あれ程高かった視聴率に翳りが見え始めたのである。具体的に言えば、フジテレビが制作したビートたけし、明石家さんまなどがメインのお笑い番組に負けたのである。因みにそのお笑い番組の放送時間は、ドリフの番組と同じ土曜日夜八時である。

斯くして『8時だョ！　全員集合』は終焉を迎えたのであるが、その後もドリフ自体の快進撃は続いた。彼らのコント自体は相変らずの人気で、各キー局はドリフの長時間の特番を制作し続けたのだ。私もそれらが大好きで大部分を見ている。最早、それらからは志村の遠慮した風情(『8時だョ――』の中盤から感じられなかったが……)は微塵も感じられず、寧ろ、〔コント王〕と称しても決して大袈裟でない様な雰囲気を漂わせていた。

兎も角、馬鹿らしいのだ。その馬鹿らしさが真面目に馬鹿らしくて大絶賛に価するのだ。急げ急げ――。私に与えられた枚数が終って仕舞う。因って少々端折って先を急ぐ。やがてドリフ解散。その頃の志村けんの人気は弥増しに増し、『バカ殿』シリーズなどを初めとして、数多くのレギュラー番組を持っていた。アクの強いクセのある笑いがこの上なく心地良いのだ。私は嬉々として志村の出る番組にチャンネルを合わせ、これ以上ない馬鹿らしさを真面目に楽しんでいた。

その志村けん(本名は志村康徳)が突然に亡くなったのは三月二十九日。死因は新型コロナウィルスに因る肺炎であった。マス・メディアは大騒ぎ。テレビ各局は過去に放映された彼の番組を繰り返し流し続け、新聞・雑誌は彼への称讃の声で溢れ返った。テレビ各局が彼の番組を繰り返し繰り返し流し続けたのはまだ判る。生前、各局とも志村には視聴率を大いに稼がせて貰ったのだから、彼には恩義がある。

私が屹度して異論を唱えたいのは新聞である。特に私の購読している新聞(小生は貧しいので、全国紙を一紙だけである)に対しては、強い憤りと違和感を覚えた。この新聞は志村やドリフを絶賛し、志村やドリフ絶賛の連載記事を十数回に渡って書き続けたのだ。おいおい、ちょっと待って呉れよ――。今更そんな記事が良く書け

たよなっ。君の所は余り遠くない過去、ドリフや志村が演じるコントを、糾弾する側に与していたのではなかったか――。

〔子供の教育上宜しくない〕、〔食べ物を粗末にする〕、〔教育者を舐め切っている〕、〔老人を小馬鹿にしている〕、〔劣情感を煽り立てる〕、〔悪巫山戯（わるふざけ）が過ぎる〕……。その様な彼らを糾弾する声が、一部から澎湃として上がった。それらの運動を大真面目になって主導したのは、全国のＰＴＡを中心とした〔子供達の教育を憂えている〕と称する各種の団体で、私が唯一取っているその新聞は、彼らの御先棒を真っ先に担いだ論調で陰に陽に味方し、ドリフや志村けんらを揶揄しまくっていたのではなかったのか……。それを、志村が新型コロナウィルスで不幸にも死亡したとなると、手の平を返した如くの下にも置かない〔大絶賛の嵐〕――。確か、いかりや長介が死亡した時もそれが見られた筈だ。

彼らを揶揄して批判的な言動を縷々展開していた、過去の事など全く噯（おくび）にも出さず、只管只管、これ称賛を浴びせ続けたのである。私は志村の死に因って長々と書き続けられた一連の特集記事に、大いなる違和感を抱きつつ、大マスコミ一般に、改めて深く淋しくなる様な暗澹たる失望と、揶揄にも近い嘲笑の一つも浴びせたくなった。

私の唯一購読している新聞は、何時も〔御高説〕をその購読者達に垂れ賜い、現今の日本の情況を愁い怒っている。この新聞社は過去から様々な誤報を性懲りもなく繰り返し、その都度、社の幹部連中が責任を取る形で辞任しているのだが、己の社の主張・論調はそれでも前と何ら変化は見られない。恐らく、これからも変らないであろう。

〔アッパレ〕と申すしかなし。〔オミゴト〕と申すしかなし。〔サタノカギリ〕と申すしかなし。私は五十年近く、この新聞だけを読んでいる。昔から世間ではこの新聞（正確にはこの社が展開する主張や論調）はインテリが特別好むと称されている。若き頃、誠に愚かにも、私も何とかそのインテリになりたくて、この新聞を読み続けて来たのだ。当然とは言えインテリ何ぞにはなれなかったが、今でもこの新聞に〝大変感謝〟している。

私は確信に近い形で以下の様な思いにようよう辿り着いた。この新聞の〔真反対の主張を良とせば〕、世の正義は貫徹されるのだ、と。更に、有り体に身も蓋もなく申して仕舞えば、マスコミなんかは何所も信じないし、勿論、インターネットなどもだ。それらは何らかの情報らしき物を得る一手段でしかない。

志村けんの誠に不幸なる死を伝える報道に対し、私はこんな愚にも付かない馬鹿馬鹿しい感慨が、愚昧限りなき脳裡を過った。だがしかし、ドリフ・志村を今更ながら称讃しまくる記者達を、義憤に駆られて思わず口穢く罵倒して仕舞ったのだが、恐らく、いや、間違いなく、記事を書いた諸君は私より大分若い筈である。因って、幼げなちびっ子の頃、全国のドリフや志村のファンと同様に、彼らの番組に大声援を送った可能性が考えられる。その様に考える時、記者諸君、特に連載記事を書き続けた女性記者（彼女は音楽担当記者で、編集委員でもある）に、一条のエクスキューズらしき物を与えても宜しいのかも知れない。

良く良く考えれば、ＰＴＡなどと一緒にドリフ・志村のコントを指弾し、その記事を書いたのは一世代近い前の先輩記者連中で、決して彼ら彼女らではない。そこに微かな〔希望の光〕を無理にも見い出し、この新聞の主張・論調が少しでも真っ当になれと祈る許りである。新型コロナウィルスの猛威は世界中で多くの死者を出しているが、当然その中には各界の有名人も数多く見られる。日本でも例外ではなく、有名女優もコロナの病魔に襲われて亡くなった。岡江久美子。世間ではおしどり夫婦と称されていただけに一層痛ましさが増す。

再三書いている様にコロナウィルスは数多くの人命を奪ったのだが、当然とは言え他の病魔がこの世からなくなる筈もなく、芸能関係者が他の病気でこの間にも亡くなっている。以下は彼らに関して些か愚見を書く。内田勝正。彼が肝臓ガンで死亡したのは一月三十一日。享年七十五。

内田勝正と聞いても、一般の多くの人でその名と顔を思い出す人は、残念ながら極々少数であろう。彼は役者である。その出演作品は数多い。私は幸いにも役者であるのは辛うじて知っていたが、内田の死を伝える報に、彼の全く知ら

れざる一面を見た。役者・内田勝正を知りたければ、TBS系で長い間シリーズ化されている人気時代劇『水戸黄門』を見れば良い。午後四時頃、全国のTBS系列の地方局で連綿として再放送されている筈だ。

〔水戸黄門〕シリーズでの出演は、これ皆悪役許りで何でも一度も善人役はないらしい。〔水戸黄門〕への悪役出演は役者の中で最多記録らしい。内田自身は内心、その悪役振りを十分に楽しみ、「次はどんな無様振りでヤラれるか」を常に考え抜いていたらしい。見事な役者魂なり。そんな彼の死亡を伝える報道は、内田勝正の全く違う一面をも伝えていた。

彼は〔日本俳優連合〕の副理事長を務めており、特に、無名に近い俳優達の地位向上に大いに努力し、遂に、二次利用された映画作品に対し、それらに出演していた各俳優にも報酬が払われる権利獲得を勝ち得たのだ。ドラマの極悪人は実社会では稀代の善人であったのである。大物監督も亡くなった。大林宣彦。死因は肺ガン。享年八十二。我々は大林を〔映画監督〕と呼ぶが、彼自身は〔映画作家〕と名告(なの)っていたらしい。私は彼の映画を余り多くは見ていない。所謂、〔尾道三部作〕ぐらいか。個人的に大林宣彦に就いて強烈な思い出がある。可成り前の事なので大部分は忘却の彼方なのだが、大林がフランスの監督だったか評論家だったかに、口汚ない罵声を強(したた)かに浴びて聞くに耐えない一喝を食ったのを、今でもまざまざと覚えている。十人近い人数で行われた、内外映画関係者達の討論会での一幕である。討論のテーマは〔反戦〕とか〔平和〕とか〔戦争〕などであった、と記憶している。

戦争・平和・反戦などを〔絶対の正義〕として挙行される、この様な大多数の討論会の常として、意味をなさない観念論やうんざりする理想論が終始飛び交い、私などは忽ち鼻白んで仕舞うのであるが、この短気と思われるフランス人も、その口であったのだろう。彼はおおよそ次の様に一喝したのだ。

「君達は何時までぐだぐだと下らない戯言をいっているんだっ――」、と。座は一瞬にして凍り付いた。それはそうであろう。予定(!?)では、座は和やかに推移して、「反戦・平和を世界の善良なる市民の手で死守し、以て飽く迄戦争反対を貫くぞっ――」の連呼の内に、シャン、シャン、シャンの大団円となる筈であったのだから。このフランス人が大林を初めとしたこの場に集まる大部分の論者の様に、〝穏やかなる反戦主義者〟だったのか、否、〝もっと過激なる反戦主義者〟だったのか、否々、彼は極々普通の常識人で、大林らの持って回った様な空理空論紛いの〔反戦平和論〕に、唯々、うんざりしただけだったのか。私にはどう考えても兎も角うんざりし、焦れて一喝した様に思えたのだが……。

やっとの事で最後の話に辿り着いた。ここまで我が愚論を読んで下さった人々に、絶大なる感謝の誠を捧げる。もう少しでその愚論も終りますので、今暫くの御辛抱を。

最後はトッポ・ジージョの死亡に就いて書く。最初に書いた様に彼は映画評論家であり、トッポ・ジージョとは、彼の論敵達が揶揄嘲弄する為に付けた嘲りに満ち満ちた綽名(あだな)である。名は松田政男。私が映画に夢中になっていた若き頃、映画監督や映画評論の舌鋒は皆々凄まじいまでに激烈で、毎月、映画雑誌には彼らの個人に対する罵詈雑言がこれでもかこれでもかと躍り、敢えて申せば、当時の若い私はそれらを読むのが〔無上の楽しみ〕(!?)になっていた。難解なのだ。兎に角、難解なのだ。松田政男の物する映画論には恐ろしく難しい用語が縦横無尽に飛び交い、これ全編意味自体を理解するのに痛く難渋した。

松田の死が報じられるまで、私はもうすっかり彼の存在自体を忘却していたのだが、その死の一報が、四十数年も前の映画や映画論に夢中になっていた日々に連れ戻した。松田政男の映画論の中核であり、世上でも一番有名なのは、恐らく、所謂〔風景論〕であろう。今の私に、いや、若い頃の私であっても、松田の展開した風景論を上手く説明する事など出来はしない。繰り返すが難解極まるのだ。そうであるから興味のある方には、彼の製作した映画を見て貰えばと考えた。この映画は実際に起った事件をモチーフにしている。映画の題名は『略称・連続射殺魔』。松田の活動の主力は映画評論であるのだが、映画作りも行ったし、革命家と称して政治闘争にも積極的に関わった。所謂〔永山則夫連続殺人事件〕の映画化である。四人

を次々と射殺した永山少年（事件当時）の裁判は、その異常さに世間の耳目を集めたのであるが、永山は事件当時少年であった為、その量刑を巡って何回も下級審に差戻され、賛否両論が渦巻く中、彼、永山則夫は結局死刑に処された。余談であるが永山が獄中で書き上げた手記は、当時ベストセラーになっている。確か『無知の涙』と題されていたのでは。

実はこの事件は別の監督でも映画化されている。新藤兼人の『裸の十九歳』である。永山役は原田大二郎、その母親役は乙羽信子。

新藤作品のテーマはずばり極貧。松田作品のテーマは永山が幼い頃から見て来たであろうその風景。これでもかこれでもかと、永山が幼い頃から見て来たであろう風景のみが延々と続くだけ。この松田の映画には例の大島渚も関わっており、更にその下で助監督務めた足立正生も一枚噛んでいる。大島には『東京占戈(せん)争戦後秘話』と題された、風景論その物の様な作品がある。製作年度は何んと［70年安保］の年である。

その安保騒動の為か、映画界もそこらじゅうでゲバルトが見られた。論争を繰り返す内、味方であった者が敵になり、ずっと敵であった者が今や味方になったりするのだ。松田政男は論敵達からトッポ・ジージョと揶揄されたが、何々、松田自身も論争相手を、言われた以上の口汚なさで罵りまくっているのだ。私と言えば、昔からアンチ・松田であった。彼の死の報が、昔日の恥多き日々を思い出させた。今の私は、もう難解な映画も映画評論も一切目を通さない。

コロナで御籠り状態が続く時、今からでもそんな類の本を一冊でも二冊でも読もうか？

それは蓮實重彦か或いは四方田犬彦辺りになろうか。ではあるが、優柔不断な情けない私は未だに思案投げ首の儘で、如何な実行してはいないのだ。多分、いや間違いなく、私はそれを実行しないであろう。嗚呼――。

――了――

筆者の近況等（順不同）

堀江広子＝ウォーキング中に、堤に棲みついている四匹のヌートリア母子の巣を観察するのが日課です。ある時は、二匹の子たちが巣から出て取っ組み合いしているのを見ました。ヌートリアは巨大なネズミといった姿で、太く長い尻尾を見るとギョッとしないでもないけれど、子猫のようにじゃれ合う光景は感動的でした。ある日、その巣に亀たちが同居するようになり、まるで鳥獣戯画です。お互いに何と思っているのかなと想像しながら眺めていると、ひとときコロナ禍を忘れられます。皆様、コロナから身をお守り下さい。

門馬徳行＝米国防総省がさる4月27日、未確認飛行物体（UFO）の映像を3本公開した。いずれも海軍のパイロットが撮影した動画で、怪しき物体が飛行する瞬間が見事に捉えられている。UFOに関しては誤認した情報も数多くあり、あまり信用されていないが、これはいかにも信憑性がある目撃例だ。このことがすぐ宇宙人との遭遇へとはいかない。いずれ、すべての謎が明らかになる日がくるだろう。その時を願って、今日はカーペンターの傑作「遊星からの物体X」でも観よう。

片桐公男＝コロナ感染リスクを避けながらカメラ片手に、花の写真を撮影に近所や必要あれば遠方まで「散歩」に出かけています。主役は花ですが、脇役に神社・仏閣、はては美人が入れば最高の構図となります。

中田好美＝地震、台風、異常気象、新型コロナウイルス。いつどうなるかわからない日々のなか、なんとか生き延びたいと願う今日この頃です。

押切令子＝ガンとは相変わらずのお付き合いです。昨年2回目の抗がん剤治療を終えた後、思い切ってひと月弱イタリアを旅してきました。夫とではなく、友人と・・・ですが。フィレンツエに三週間、ローマに五日、ルネサンスのイタリアを堪能してきました。あまりに素晴らしく、今年も頑張って行こうと思っていたのにこの騒ぎ。残念ながら来年後半以降になりそうです。それまで元気でいなくてはと思っています。

宇井相＝テレビが壊れて十ヶ月。修理するにも買い替えるにも先立つものがない。映画番組を楽しめぬのが寂しいですが、無けりや無いで何とかなるものですね。

山下雄平＝3月に脊柱管狭窄症と診断され、内視鏡手術を受けました。6日間の入院。退院のときに切り取ったヘルニアを記念にくれました。今は快調です。

久保嘉之＝タクシー運転手殺すに刃物はいらぬ。コロナが一年も続けばいい。

関田孝正＝3号雑誌で終わらせまいと始めた「シネマ気球」、40号を迎えました。執筆者、読者各位にお礼申し上げます。

五体倒地で聖地に向う家族の物語

「巡礼の約束」（監督＝ソンタルジャ）

チベットの監督による中国映画。舞台は現在のチベット。五体倒地をしながら聖地ラサへ向け巡礼の旅をする三人の家族の物語だ。旅をするのはヒロイン、ウォマ（ニマソンソン）、夫ロルジェ（ヨンジョンジャ）、前夫との間にできた男の子ノルウ（スィチョクジャ）。

巡礼の旅はそもそもウォマが言い出した。冒頭、ウォマは医者から病状が芳しくないとの話をされる。ウォマはロルジェにレントゲンの写真を見せながら「大丈夫だ」と言ったりするので、ロルジェの体を気づかって、聖地への旅もロルジェの体の回復を願って行うのかなと私は考えた。ウォマはロルジェと義父との3人暮らしだ。ウォマは父母のくらす実家に帰る。そこには小さい男の子ノルウがいる。ウォマはノルウに対して自分のことを「母さん」と呼んでいるので、ノルウはウォマの息子だということがわかる。なぜ母親と一緒に生活していないのか。心を病んでおり、母親の元を離れて祖父母と暮らしているのかなと私は想像した。が、ロルジェはノルウの義父だということがわかり、納得する。ウォマとロルジェは結婚して6年。ノルウはロルジェが義父ゆえになつかないのだ。

さて、巡礼の旅だ。五体倒地の旅のために、三人の住む土地ギャロン村から聖地に達するのに一日五キロしか進めないので、ほぼ一年間かかる。想像を絶する気の遠くなるような旅だ。過酷な旅ゆえにロルジェは妻のウォマに対して強硬に反対する。それでもウォマの決意は固い。一人で旅を始める。しまいには、ロルジェもノルウもついてくる。3人での巡礼の旅が始まる。

この五体倒地、別の映画でも見たことがあるので鮮明に覚えている。体を前に倒し再び起き上がりながら進んでいくのだ。どんなふうにするかというと、まず大きく手を広げ二回手を合わせたら膝をついて体を伸ばして地面にうつ伏せになり、そこで手を大きく合わせて起き上がり、一二歩歩いて再び同じ行動を繰り返して前に進む。体の前面が汚れてもよいように皮製の前掛けをつけ、両手には木製の厚板（平べったいサンダルのような形）をつけてそれを行う。天気に関係なく、雨の日もその行動を繰り返す。五体倒地を続ける道路は、舗装された2車線の道路だ。時折トラックなどが通り過ぎる。続けるばかりでは疲れてしまうので、途中で休憩をはさむこともある。中断した場所に石などを置いておき、再開するときには場所がわかるようにしておくわけだ。夜はテントを張って休む。火を起こして煮炊きをしながら旅を続ける。旅人に親切に湯などを提供する人もいる。チベットは山々に囲まれ、荒涼とした景色が背後に広がる。

夫のロルジェの病気回復のために巡礼の旅をすることにしたのかと私は思ったが、病気の主はウォマ自身だ。自分の病気回復を願って行うのとも違うのだ。ウォマの前夫は病気のために亡くなっており、生前に前夫とラサへの旅をする約束をしており、二人で撮った写真と前夫の遺灰で作った仏像をラサの寺院に収めようとしていることが旅の目的であることが明らかになる。

巡礼の旅半ばにして、ウォマの病状は悪化し帰らぬ人となってしまう。ロルジェは近くの寺院に赴き弔いをお願いする。ロルジェは寺院から数珠を借り受け祈りを捧げる。寺院の壁には亡き人を偲んで写真を貼りつける習慣がある。ロルジェもウォマと前夫が並んだ写真を貼りつける。そのあと面白い行為に出る。二人が一緒に仲良く写っているのが面白くないのだろう、写真を半分にちぎって、二人を離して壁に貼りつけるのだ。ロルジェはウォマの愛を独占したいのだろう、くすっと笑ってしまうシーンだ。

三人の旅はそこで終わるのか。ロルジェはノルウを祖父母の元に返そうとするが、ノルウは「ラサに連れて行くと約束したじゃないか」と反発する。やむなくロルジェはノルウとラサをめざす。今度はロルジェが五体投地をしながら。

途中、ふたりは息絶え横たわる親ロバと傍らにぽつんと立っている子ロバを見かける。この子ロバがノルウのあとをついてくる。ふたりは子ロバと一緒に旅をすることにする。子ロバはふたりの荷物を背負ってお供をする。雪が降り積もるようなときもある厳しい旅も終盤に近づく。ロルジェはウォマへの思いを胸に、ノルウもある目的をもって――。

ノルウのロルジェに対する心の壁が旅を続けるなかで溶けていく。ロルジェもノルウに愛しさを覚えるようになる。ウォマの前夫に対する愛、ロルジェの妻に対する愛。ノルウのある思い。巡礼の旅を通して各人の思いが綴られるとともに、新しい絆が育っていく。

それにしても、子ロバが映画にいい味を添えている。（関田孝正）

【編集後記】緊急事態宣言下の4月20日、流山運転免許更新センターへ免許証を取りに行くはずだったのだが、私はペーパードライバーなので、郵送でこうするしかないと思ったのだ。（私は高齢者の手続き適用外。）ノルウはこうしたときに検査のいかなる写真撮影・10分乗り場に10人もいるのだから、ルルは私のスマホで直前に電車でバスで5分の座席に離れて散髪。4月24日、帰りの中に5人の乗客が混み合っていて、ルルは自分の髪をくくることにした。その後、コロナには感染していない。（関田）